アマリリス

高遠 響華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アマリリス

【Ｎコード】
Ｎ５３１４Ｔ

【作者名】
高遠　響華

【あらすじ】
斎藤悠希（さいとうゆうき）は、　性別は男だが私服姿は女の子というか美少女に間違えられるくらい愛らしく可愛い！
今まで好きな女の子に告白するけど、すべて玉砕している理由は「あたしより可愛い彼氏は…ごめん」
なんてひでー言い訳！！
そんな時、先月亡くなったはずの母が現れ、

「女の子として生まれ変われるわぁ～！」
と進め（強引にだが）られ何故か、異世界へ飛ばされたのだったのだ…。
確かに女の子になったけど中身は一応男の記憶があるからイケメン王子に迫られても！どーすりゃ良いんだっ！俺っっ！

始まり1（前書き）

初投稿です。
よろしくお願いします。
始まりは大変ですね…ふぅ

始まり1

「俺…次は女の子に生まれ変わりたい…」

テーブルを挟んだ目の前のテレビの映像を凝視し、思わず呟いた。
画面には、クロコダイル族という日本からは遠く離れた所に住んでいる人々について紹介している。
クロコダイル族は成人（１５歳）を迎えると全身にワニの鱗の入れ墨を入れるみたいだ…。
グッタリと脱力した若者が、藁葺きの小屋から無造作に二人の男に担がれては、次々に外に運び出されている。

同じ男だし年齢も同じ…、ただ住んでいる場所、産まれた場所が違うだけで…恐ろしい習慣があることを知った。

申し訳ないけど…！

「俺は日本に生まれて良かった！」

思わず歓喜の声がもれてしまうけど…、不安が心を過ぎった。
まだ油断できない…！もしかしたら…いつかは、クロコダイル族に

生まれるかもしれないからだ…。

それで、冒頭のセリフに戻る。

えぇ～！そんなことで！と、突っ込みたくなるが本当に恐ろしかった…。入れ墨をいれたことがないから、想像できないけど…あの、脱力した若者の映像が強烈で、忘れられない…。

「女なら何処に生まれても安心だしな！それに…俺は…、女の子の方がいいのかもしれない……。」

暗くなってきた気分を振り切るように、首を振り溜息をはくと、夕食の残りを口に運ぶとしっかり噛みしめ飲み込み、

「ごちそうさまでした」

以前は、母さんと二人で食べていたから返事があったけど、今は……返事はない。もう自分しかいないのに、今までの癖で思わず言ってしまった。

キッチンで、食べ終わった食器を片付けてから居間に戻ると、そこには……先月亡くなったはずの母さんがいた…。

驚いて、見間違いかと眼をパチパチさせるけど……、全く消える気

配はない。

「悠希(ゆうき)、逢いたかったわ～！」

思わず目を見開き、固まっていると母さんがギュウッと、俺に力強く抱き着いてきた…。

なぜだー！

まさか生き返ったとか…。様々な思考が頭を過ぎていくけど……、混乱するばかりで言葉が出て来ない。

母さんの体温が伝わってくるのを感じるし、腕の上から抱き着かれていて腕も痛いから夢じゃないのか…？

始まり１（後書き）

次は、あらすじと少し重複してしまうかも…ごめんなさい。

始まり2（前書き）

ちょっと説明が多いのか…段々と良くなると良いですね

始まり2

母さんは、世間でいうところの愛人だったみたいだ。

俺の……まぁ、一応父親は母さんの働いていた会社の社長さんで、母が俺を身篭った時…、

「降ろしてくれ…すまない…妻とは離婚しない」

頭を下げながら慰謝料をくれて、何度か説得しに足を運んだみたいだけど…母は頷きながらも、俺を降ろさなかったらしい。

その後、直ぐに会社を辞めて引っ越すと小さな食堂を開いた。

母さんのご飯は、とても美味しくてお店も常連客で繁盛していたから、物心がつくころには俺も手伝っていた。だから料理は無意識に得意になっていった。

「悠希は…、あたしの宝物だから…幸せになってね…」

亡くなる直前に母さんはそう呟くと、真っ白な病室で医者と俺に看取られてあっけなく逝ってしまった。

死因は過労死だった…。

「悠希がいて幸せ～！毎日楽しい！お店も賑やかだし嬉しいし～！」

毎日、笑顔で鬱陶しいくらいに元気だと思っていたのに……、無理していたことに全く気が付けなかった……。後悔してもしきれないし……守れなかった気持ちに胸が押し潰されそうになった。

「母さん…ごめん…」

もし、もう一度遇えたら謝りたい！って思ってたけど…。

「母さん！！なんでっ！」

抱きしめてくる母さんを身体から剥がし、

「母さん！死んだよね？」

「悠希～！一ヶ月ぶりね～！死んだわよ～！逢いたかったわ～」

もう一度、懐かしい笑顔で抱き着いてくるのを両手で母さんの肩を

抑え、

「説明をしろ〜！何がなんだか解らないんだけど……」

「母さんね、どうやら魔女だったみたいなの！」

抑えている両肩から手を離すと、母さんは腕組みをしながらあっさり魔女という単語を出してきた……。

「母さん…余計に解らないんだけど…」

脱力感でいっぱいになりながら母さんをみると、いつもの席にさっさと座り込み、俺の腕を掴んで引っ張り

「とりあえず……説明するから！座って座って！あっ、お茶とお菓子だして！」

掴んでいた手をパッと離して、キッチンへ追いやられる。

死んでからも、母さんの鬱陶しさもずぅずぅしさも変わらないなぁ…と思いながらとりあえず、お茶とお菓子を用意し座る。

互いに茶をすすると、ほぅ…と一息つくと母さんが説明を始めた。

「母さんね、前世は魔女だったみたいなの〜！この世では、記憶を取り戻すきっかけがなくて死んでからだったから、あんまり魔力がないんだけど…さっきあなたが女の子になりたい！って言ってたじ

ゃない？お母さんが叶えてあげるわぁ～！」
」
母さんは、凄いでしょう！と掌を天井に向けて両腕を伸ばし、得意げに張り切ってる。
申し訳ないけど、全く意味が解らない……でも、そういうものか…と納得するしかなかった。

確かに魔女と言われれば納得できることもある。

母は４０歳で亡くなったけど、見た目は２０歳くらいにしか見えないし背は俺より少し低い１５０？くらいで、目はぱっちり二重で睫毛も長くお人形さんのように、とにかく可愛くて愛らしい女の子のようだった。

俺もその血を別けて貰ったみたいで、近所では美人姉妹（？）のようだと評判だった。
美人姉妹って俺は男だぁ！しかも息子だっ！と何度突っ込んだか……懐かしさで一瞬、ボケッとしていた所に母さんの声が聞こえてきた。

「ねぇ、聞いてるのぉ～？
」
俺の顔をまじまじと覗きながら、母さんは話しを続けていく。

「確かに、悠希は可愛いからね～！お母さんも娘が欲しかったし、性別を間違えちゃったかもねっ！ちょっと魔力をためたら、出来ると思うから女の子になりましょう！」

決心したように母さんは、立ち上がるとポンッと目の前から消えた…。

「へっ？ちょっ……！か、母さん？何処に行った！？まだ話しは途中なんだけど…」

一方的に話して、急に消えたからマヌケな声が洩れてしまった。慌てて家中を捜したけど何処にもいない…。
やっぱり夢か幻だったのかと、居間に戻るとカップは2個ある…夢じゃないみたい…かな？

しばらく座って待ちながら考えるけど、意味が解らないし…母さんは現れない。風呂に入れば、サッパリして目が覚めるかもしれない！そう考えると、のそのそ立ち上がり脱衣所に向かった。

脱衣所で服を脱ぎながら鏡をみると、調度脱ぎかけで胸が隠れてるからか、女の子にしかみえない…。
この容姿のおかげで女の子には、

「女の子のあたしより可愛いなんて…ちょっと嫌…かな…ごめんなさい！」

「友達かな…女友達…としてしかみえない」

悲しい女の子にフラれた思い出がある。はっ！として目を見開き、そういえば男から告白もされた…。

「付き合ってください」

休みの日に友達と遊ぶ予定があったから、待ち合わせ場所に向かう途中で呼び止められて振り返ると、顔を真っ赤にした高校生くらいの男が頭を下げて手を差し出してきた…。その手に冷たい視線を送りながら自分の胸を親指で指差し、

「あのっ！俺、男なんだけど！」

「へっ？嘘だ～！」

説明しても信じられなかったみたいで、去り際に俺の分身を握って確かめた奴もいたなぁ…フッ…。

ムカムカしてきたからちゃっちゃと服を脱ぐと、乱暴に脱いだ服を洗濯機に放り込んで、浴室に向かった。

身体を洗って、湯舟に浸かると一息ついてリラックスしていると身体がピンクに光りだした…。

湯舟の様子もおかしい！湯舟のお湯も、洗濯機のように渦をまいてそのなかに身体が吸い込まれて行く…。

「えっっ！？ちょっ…なんだぁ～…！だ、誰か…！死ぬっ……溺れるっ…！」

必死に湯舟の端にしがみつくけど、渦の力はどんどん強くなって……ついには、手が滑り飲み込まれてしまった。

…チャプン…

湯舟のお湯が跳ねる。

誰もいなくなった浴室のドアが開いた。

「悠希～！女の子になったぁ～？悠希～？」

ワクワク声の母さんの声が聞こえたような気がする…けど、返事が

できない！息ができないし！渦に巻かれて目も廻ってきた…。

気持ち悪い…

そのまま気が遠くなり、流れに身を任せてしまった。

始まり2（後書き）

やっと、異世界に行けました！

異世界へ（前書き）

ゆっくりと進めます。　　文章で表現するのってなかなか難しいですね…解りずらかったらすみません！

異世界へ

目が覚めると、お湯に浸かってプカプカと上向きに浮いていた。

「うわぁっ！」

…おっ溺れるっ…！、咄嗟に手をついて立ち上がろうとしてしまってバランスを崩したけど、取りあえず足が着くことに安心する。

……お湯があるから、浴室ぽっいけど…俺の家の浴槽は、大の字では浮けるほど広くはないはずだ…。

キョロキョロと、周りを見回すとまるで、旅館とかの大浴場みたいだけど…白に統一されていて、水瓶を持った女の人の石像からお湯がでている…。
周りを軽く見渡すと、湯気で良く見えないけど誰もいなさそうだ。

湯舟からも柱が何本か天井に向かって伸びている。それに身を隠しながら、取りあえず一周してみることにした。なかなか、お湯に足を取られて上手く歩けない…。一歩ずつ慎重に歩いていくと、

「湯気で良くみえないけど…あっ！」

…バシャッ…

「ひ、人いるじゃ～ん…」

声にならない声で呟き、柱の影に一度隠れると、そぉ～と人影を観察してみる…。

良く見えないけど…銀色の髪をルーズに束ねた色っぽい首筋がみえる。

「女の人みたいだけど…ぎゃっ！近くに鞘みたいなのがある…」

…最悪だ…！多分…、痴漢に間違えられて切り捨てられるかも…汗が頬を伝って行くのを感じ、血の気が引いていく。Uターンして我慢競べだな…早く出てってくれないものか…。

そろそろとUターンしようと思った時ツルッと足が滑る。…なんで静かにしなきゃって思う時に限って音が響くのか…、

…バッシャンっ…！

「誰かいるのか……！！」

…いますっ！恐くて声はでなかったけど、俺は叫んだ！ん？男の声？…男の低い声が浴室に響く。

手首を掴まれ正面をむかされると首筋に冷たいものが触った気がして、相手の手に視線を落とすと、さっきの鞘から抜いた中身を握りしめていた。

「なんだ…新顔の湯浴みの侍女か…今日は断ったはずだが…それに…」

カタカタと軽く身体が恐怖感で震えている…、全身をくまなく観られている視線を感じ声の主の顔に目をむけた。

…男だったのかぁ～…痴漢にならなくて良かった！安堵して目を閉じると溜息を吐き、もう一度男の表情を見るため目を開けた。めっちゃめっちゃ美形だった！男の俺でも思わずみとれてしまう…ただ目が獲物を狩る鷹のように鋭い…ヤクザ役をやったらめっちゃハマりそうだ…。それに…なぜ女の人に間違えたのか解らないくらい、鍛えられた身体が目に入ってきた。思わず、ジロジロと身体を見ていると男の口が開いた。

「まだ、幼いな…でるとこでてねぇ…大臣か誰かの差し金か？答えろ！！」

…ひぃ～！虎の間違いかも～…低い声が脅すように身体をなぞり、首筋には相変わらず刀があてられている…。心臓がバクバクと破裂しそうなほど音をたててるのが解る…、決心し男の目をみて、

「俺は男だし！もう、１５歳だから幼いとか言うなっ！家で風呂に入ってたら急に吸い込まれて気が付いたらここにいただけだ！だから怪しいけど怪しい者じゃない！」

…ふぅ、言ってやったぜ！なんだか呆気にとられてるのか反応がないなぁ…、不安になりちらっと相手の顔をみると…、唖然とした表情を浮かべたかと思うと吹き出した。

「プッ！アハハハっ！なかなか面白い余興だな…！どっからどうみても女にしか見えねぇが…ハハハっ！」

「何～！確かにまだ毛は生えてないけど…」

頼りない身体を笑われたと思い自分の身体の方へ目をやると、目が大きく開いて唖然とした。

なんとなくだけど胸が膨らんでいるような……恐る恐る下腹部に目を移すと…なっない！！ツルッとしている…っ！

つぅ〜……と、鼻から何か垂れる気がして鼻を触る…と赤い血が目に飛び込んできた。そういえば目が廻るし…

「気…持ち…悪いっ…」

「あっ！おいっ！しっかりしろっ！…チッ、めんどくせぇな…」

舌打ち混じりで刀を鞘にしまう気配がした。頭の中に凄く恐い声がグルグルまわる…。もぅ〜無理だ！立っていられなくなり、浴槽に顔からダイブするビジョンが浮かんだ…。思った衝撃はなく、ガッシリした腕で身体を支えられたような気がするけど…、すまん…！そのまま…支えていてくれっ…。そう思うと、目を閉じて完全に男に身を預けた。

異世界へ（後書き）

良い案が浮かばすやはり気絶に納まりました！

ずっとお湯に入っていれば湯あたりもしますよね…

出会い？再会？（前書き）

良いタイトルが思いつかない…

なかなか思うようにキャラが動かせないかもです…

出会い？再会？

母さんが恐いくらいの笑顔を俺にむけている…。こういう時は、絶対に断れない要求をしてこようとしている時の顔だ…。なんだ…？思わず構えてしまうと母さんは、口を開いた。

「悠希！女の子になりましょ～！絶対可愛いわぁ～」

「今じゃない！次に生まれてくる時は！って言ったんだ！」

俺は慌てて言い返したけど、母さんは得意げに腕を組みながら俺をみている。

「そぉなのぉ～？でもすっかり女の子よっ！悠希可愛いっ！胸は遺伝だから、ちょっとしか膨らまなかったわねぇ～…、あたしより大きくしないわよぉ…」

全く話しを聞いてくれない態度に腹が立ってきた！俺は、息をすいこみ一気に吐き出した。

「胸が小さいとかじゃなくってさぁ！…」

ガバッと起き上がるとおでこから冷たいタオルが落ちる。
…夢か…辺りを見回すと、テレビでみたような高級ホテルの一室みたいだけど…ここは何処ですかー！心の中で絶叫してしまう。

「き…気がつかれましたか…？」

ニッコリ笑ったというより笑いを堪えているようにしかみえない女の人と目があう。

さっきの寝言を聞かれたようだ…。

俺も自分の声で目が覚めたし…、恥ずかしー！穴があったら入りたいっ！顔に一気に熱が集まるのを感じ、顔を下に向ける。今、鏡をみたら間違いなく赤いだろう…。

「ここは…ユートリア大陸の北部を治めているリュ・クラウド皇太子の城ですよ」

小さく咳ばらいをして、気を取り直したのか女の人は穏やかな笑顔で、俺が質問する前に、ここがどこか説明してくれた…。
ユーラシア大陸なら知ってるけど、聞いたことないってことはやっぱり知らない所なんだ…。覚悟はしていたけど改めて言われるとなかなかショックだ。

そういえば……、思い出したように慌てて自分の胸を抑えると、や

っぱり膨らみが感じられた…。そろそろと下の方も服の上から触るとやっぱりない…。
布団にボスンっと後ろから倒れ、夢じゃないんだ…！いきなり女の子になって、知らない世界だなんて心細くてたまらない…母さんっ！一体何をしたんだっ！逆恨みのように天井を睨みつける。

しばらく睨むと、フルフルっと頭を振り前向きに考えることにして、起き上がる。
だいたい、言葉が通じて良かったじゃないか！見た目はヨーロッパ系の外人みたいだけど…、服も着せてもらったし…、恐らくその作業をしてくれた女の人の方を向き頭を下げながら、

「服着せて頂いてありがとうございます！　俺は佐藤悠希。悠希ってよんで良いから！ところで、おねいさんの名前は？」

女の人の方に顔をあげると、気にしないでくださいと手を振り優しく微笑まれた。

「ユーキ様ですね、私はカレンと申します…。ユーキ様のお世話にと、皇太子様から命を頂きました」

振っていた手をスカートの前に持ってくると、会釈してきた。カレンさんはメイドさんぽい服装もしっかり整えられ、物腰が柔らかく、ベテラン侍女な雰囲気が漂っていて、安心感に包まれる。

俺の母さんも、カレンさんみたいに落ち着いた雰囲気だったら良かったのに…あのマヌケ！おたんこなすっ！と心のなかで罵倒していると、中身の入ったグラスをカレンさんが差し出してきた。

「飲み物でもいかがですか？」

いつのまに用意したのか…グラスを注視し、確かに喉がカラカラだ…グラスを受け取ると一口飲む。

「美味しいっ！」

喉が渇いていたからかもしれないけど、透明に近いのにほのかに様々に新鮮なフルーツの味がして、特にマスカットのような味が爽やかに引き立つ…思わず声が飛びでてしまった。
夢中になって、ジュースをゴクゴクと飲んでると部屋のドアが開く。

…ガチャ…

「殿下…」

微笑ましく俺の様子をみていたカレンさんが、サッ…とドアの方に

向き直り、一礼をしながら入ってきた男を迎えた。

「殿下…？あっ…」

思わず声がでてしまい、慌てて口を手で塞ぐ。
そこに立っていたのは浴室で遭った銀髪の男だったからだ。浴室の時はあげていた髪も今は降ろし相変わらず目は鋭い…。その鋭い目がこちらをみている…恐っ！恐いけど引き付けられ目が離せない。

服装も黒が主体で金の装飾が施されてはいるけど、まるでビジュアル系バンドのようなゴシック系の服を着ているみたいだ…っ！

目を合わせない方が絡まれないんだよなぁ…、ジッと俺も殿下も見てくるから、バッチリ合ってしまったけど…気まずくなりそっと目を伏せた。

こっちにズカズカと歩いてくる気配を感じ伏せていた目を開けると、…足が長いからなのか、は…速い…。
あっという間に俺のベットの近くにやってきて足を止めた。

「…具合はどうだ？…」

…ギロン…こちらをみながら不機嫌そうな表情でみて尋ねられた。
鋭く目が光ったような気がして恐い…目が恐い…。
けど…、心配して見に来てくれたのかな？思ったより良い奴なのかもしれない…？改めてお礼を言おうと顔をあげると目が合ってしまった。ギロン…再び威圧的な目つきでやっぱり恐さは変わらない。

「だ、大丈夫です。ご迷惑おかけして申し訳ありませんでした…」

威圧感からタジタジとお礼を言いながら、ペコッと頭を下げる。

「ところで…お前…どっからきた？…」

頭上から訝しげな声が聞こえる…。頭を両手で抱えながら、あぁ～！何て説明すれば……しばらく苦悶して、殿下の顔をみながら話し始めた。
実は母が魔女で、俺を女の子に変えて…気がついたらこちらのお城に…と一応様子を伺いながら話していった。
…うぅ、気まずい…周りが静かなだけに俺の声だけが響く。一通り説明し終わり、殿下の方をチラリとみる。

…ギロン…恐い…さっと目を反らしてしまった。

「……そうか…それにしても…」

黙って話しは聞いてくれたけど…、余り興味なさ気に話題を変えようとしている。
えぇっ！信じたのか…、驚いて固まっていると、ヒョイと手を伸ばしてサワッと俺の胸を触わってきた。

「育ちが足らねぇ…１５にはみえねーな…」

まじまじと俺の身体をみながら何てこと言ってくるんだ。

「うわっ！触んなっ…！」

慌てて手から逃げるように後ろに下がり…、身を守るようにする。

「昨日は堂々と披露してたじゃねぇか…取りあえず飯食えるか…？」

殿下は、虚しく空に浮いていた手を腰にもって行くと、舌打ちしながら俺を見下ろしてくる。
怒らせてしまったのか…恐いけど、ご飯と聞いた瞬間ものすごくお腹が空いてきた…。

…グゥ〜…キョロキョロ〜

返事の変わりに腹がなった……。すると、不機嫌そうだった殿下の口元が緩んだ。

「…っククッ…ハハハ…おいっ！カレン…食事だ！」

楽しい玩具でも見つけたみたいな顔をしながら俺をみていた殿下は、顎でカレンさんに指示をだした。

「ただいま、ご用意致します」

カレンさんは、返事をすると静かに肩を揺らしながらそそくさと退室していった…。その様子から、あれは何処かで笑ってくるな…、はぁ〜あ…と溜息を吐き、改めて殿下と呼ばれている男をみた。さっきまでは緩んでいたはずの口元は堅く閉められて、相変わらず不機嫌そうな顔で見下ろしてくる。

恐いビジュアル系さんと二人きりで、非常に気まずく変な汗がでてくる。

は、早く戻ってきてカレンさーん！布団を握りしめながらカレンさんが出て行ってしまったドアを見つめた。

出会い？再会？（後書き）

殿下の恐さをとりあえずだしたかったんだけどね…ふぅ…無口にしたいけど話しが進まないし…思ったより話してますね…

美味しいご飯（前書き）

昨夜は疲れて投稿できず申し訳ありません…
うちながら寝たら編集に時間がかかりました。
誤字等いろいろあるかもしれません

美味しいご飯

…シーン…

部屋は静まり返り、めっちゃ気まずいんですけど！一通り笑われ落ち着いてからはまったく話して来ない…。唯一した音は、カレンさんが用意していった椅子に、殿下が乱暴に座った時だけだ。
っていうか！信じたのかよっ！殿下なんだから忙しいはずだろ？自室に戻れ～…思わず、殿下をジトッと見ながら念を送る。

「……まだ…信じたわけじゃねぇが…なんとなく無害そうだからな…」

その視線に気づいたのか堅く閉じられた殿下の口から、低い声が聞こえた。鋭い目で心まで射抜かれたようだ。
エスパーですか…？思わずビクッと反応してしまい、その反応に殿下は口の端を歪ませニヤリと笑った。

……何か企んでいるようにしかみえないけど、俺はぎこちなく頷きながら返事を返した。

「そ～ですよね…俺もまだ違和感が…あるし、まだ信じられないです…」

…コンコン…

待ち望んでいたノックの音が響いた。パッとドアに目を向ける。

「入れ…」

殿下が姿勢を変えずに応答する。

…ガチャ…

ドアが開けられると、知らない顔が様子を伺うように覗いていた。

「あ〜！やはり殿下ですか！何処に行ったかと思いましたよ〜！まだハンコ頂きたい書類があるんですよ？」

茶色の髪をした男が話しながらコツコツと殿下の近くまで詰めよると、困ったように溜息を吐く。

…二人の様子を観ていた俺の方をみると目を輝かせた。

「あっ！君が…例の…うわっ！可愛いね〜！俺は殿下の幼なじみの

シンだよ！因みに宰相をさせてもらってるよ～、主に殿下の面倒をみてるのが仕事だけどね…」

なかなか大変なんだよ…と、わざとらしく肩をすくめながら少し垂れた細長い目を更に細めて楽しそうに笑っている。

殿下は宰相さんをジロリと冷たい目で睨んでいる…。まるで、晴れの日と吹雪の日が一度にやってきたみたいに温度差が激しい…。あんまり、殿下を刺激しないでほしいな…いつ怒りだすのか心臓に悪い。

「ど…どーも、はじめまして俺は悠希です」

温度差を緩和させようと、宰相さんに向かって自己紹介した。

“俺“と言ったところで一瞬、戸惑った表情を浮かべすぐににこやかな顔に戻すと前屈みになり、

「ユーキちゃんか！お人形さんみたいだね～！ただ…話し方が可愛くないね！カレンに教えて貰うと良いと思うよ！」

にこやかに拒否権はないよ？と圧力をかけられているみたいに感じる。

「だって俺、男だから！あっ…今は…女か…」

負けじと力強く言い返すが語尾になるにつれてゴニョゴニョと口ごもってしまう。

「可愛いから、男の子口調が似合わないんだよ〜！！もったいない！！良くなったらお披露目パーティーでもしよう！！城内は娯楽が少ないし…それまでにはその短い髪も伸びて丁度良いかも！楽しみだねっ！」

宰相さんは、眉をさげ困った顔をしたかと思うととんでもない計画を発表してきた…。

「楽しみじゃねー！！俺は嫌だ！」

口を尖らせながらそっぽを向き、だいたい今まで見た目が女の子みたいだったから男らしさを求めてきたから真逆はちょっと受け入れられない…。まぁ……あまり、成果はなかったのがまた悲しい…けど…。

今までの自分を否定されてるみたいに感じて更に口を尖らせる。

…ぐぅ〜キュロロロ〜…

真面目な気分の時なのに！俺の腹は～！！なんで鳴るんだ…。

「あははっ！お腹すいてるんだね～！！」

宰相さんは、一瞬驚きつつも楽しそうに笑いながら俺の肩ををポンポンと軽く叩いてきた。

…コンコン…

「は～い！どうぞ？」

ノック音が響き宰相さんがドアにむかって明るく応答するとドアが開き、ワゴンを押してカレンさんが戻ってきた。

「失礼します、食事をお持ち致しました」

…良いにおいが部屋に香り食欲をそそられる。

う～ん！たまらないっ！ワゴンいっぱいに料理が並んでるっ！

思わず、ベットから降りるとワゴンの近くに行くと、カレンさんは

テーブルに料理を並べ三人分シルバーをセットしている。

なんで三人分なんだ…？

頭に？マークがでる…まさか！この二人も一緒に…？でも、仕事があるみたいで二人とも食べないのでは…と考えてながらカレンさんの動きをみているとセットし終わったみたいだ。

「ご一緒に召し上がりますよね？一人では可愛いそうですから…？」

カレンさんは宰相さんと殿下に向き直ると、二人をテーブルに促す。

「俺は、いらねぇ…」

殿下の表情は堅く閉ざされ、冷たくキッパリと即答した。

「殿下は朝からまともに食事をとっていないと思いますし…肉料理もご用意させて頂きました」

おぉ…カレンさん…意外にも強いのか、もう一度殿下に声をかけると宰相さんが頷きながら殿下の肩を叩きテーブルの方へ、さぁ！というように手を向ける。

「だって？カレンさんも心配してるよ～？俺も心配だよ～親友としてっ！だから、一緒に食べよう！」

「…親友はやめろ…」

殿下は、脱力したように不機嫌に制すと肩に置かれた手を振り払おうとするけど、払われる前に宰相さんは手を引っ込めた。

宰相さんに促され、渋々殿下も立ち上がり三人とも席につくと同時に、

「ユーキちゃん！あれ美味しいよ～！あれも美味しいよ～！」

さ～！食べて食べてと、宰相さんが皿にどんどん取ってくれる…。取らせてしまって申し訳ないけど…本当に美味しそうだ！皿を受け取り礼を言う。

「あ、ありがとうございます…はいっ！いただきま～す」

「美味しい～！」

お皿に盛ってくれた料理を一口食べ感嘆の声を出すと、ひょいパク…ひょいパク…次から次へ食べては美味しいぃ～と食べる。

「ユーキちゃん、だ…誰もとらないからっ！落ち着いて食べて大丈夫だからっ」

俺の食べっぷりに、宰相さんは別の料理を盛っていた手が思わず止まっている。宰相さんは、クスクスと笑いながら一息つくように止めてきた。

急いで飲み込もうとすると…んんっ…！！！

喉に詰まらせてしまった。

「カレンさん！ユーキちゃんがっ！お水お水っ！」

その様子を観ていた宰相さんが慌ててカレンさんに向かって叫んだ。

……ゴクゴクっ…

カレンさんが急いで差し出してきた水を飲み、喉の通りが良くなっていく。

「プハッ！す、すみませんっ……」

「……慌てて食うからだっ！馬鹿…」

黙って様子を観ていた殿下が呆れた顔で言ってきた…。馬鹿と言われて悔しいけど返す言葉がない…。

「大丈夫〜？ほらっ、頬っぺについてるよ？しかし…見事な食べっぷりだね〜！リュウも見習わないとっ！」

宰相さんは、ナフキンを俺に差し出しながら感心すると殿下に矛先を変えた。

「俺は、酒で良い…それに食ってる…」

殿下は、恐らく酒が入っているグラスを飲み干すと、フォークにローストビーフみたいなのを突き刺し、宰相さんの目の前にチラつかせている。

「食べてるけど、相変わらず肉ばっか食べて…野菜も食べろ〜米も食べろ〜」

そんな殿下の様子に呆れた溜息を天井に向かって吐くと、肉以外の料理を皿に盛りはじめた。

ナフキンで口元を拭きながら殿下と宰相さんのやり取りを見ている

と宰相さんは料理をもった皿を殿下の目の前に置く。

「……いらねっていってんだろ……」

殿下は目の前に置かれた皿を乱暴に持ち上げると、床に捨てている……。

「おいっ！何も捨てることないだろ～しょうがないなぁ～カレン…さ…ん」

……バシッ……

殿下の行動に宰相さんが口を尖らせ軽く文句を言って、カレンさんを呼ぼうとすると俺を凝視して固まっている。

俺は思わず……、殿下の顔にめがけて口を拭いてたナフキンを思いっきり投げつけていた…。

「悠希様っ！！で、殿下申し訳ありませんっ！」

様子を観ていたカレンさんが、慌てて俺の方に向かってくると殿下

にむかって謝っている。

「なんで、カレンさんが謝るのさっ？だってこいつったら捨てたんだよ？一生懸命野菜を育てた人にも、料理を作ってくれた人にも失礼だろっ！？それに……米には神様が一粒一粒に宿ってるんだ！粗末にしてんじゃねーよっ！バチが当たるからなっ！！みんなが許しても俺は許さないからなっ！！」

俺は鼻息を荒くし、ビシッと殿下に向かい指を差し！！

……っあぁぁ！！やってしまったぁ～…

食べ物を粗末にするのがどーしても許せないんだよな……俺……。

部屋の温度が急激に下がっていく……。

……ガタリ……

怒りのオーラを纏った殿下が、ゆっくりと立ち上がると俺を鋭く睨みつける…。

「で…殿下……」

俺の隣にいるカレンさんが震える声で殿下に呼び掛けている。

…うん！俺も……恐いっ！けど……許せないんだ！負けるもんかぁ！とそのまま睨み続ける。

俺と殿下を唖然と観ていた宰相さんが、ハっ…と、気がつくと素早く立ち上がり、殿下に向かって…、

「リュウ！落ち着けって！」

その呼び掛けに反応するように舌打ちすると、殿下は荒々しく座っていた椅子を蹴り飛ばすと…、ズカズカとドアまで行くと……

…怒り任せに部屋から出ていってしまった……。

残された三人はその行動を見届けると、静まる部屋には気まずい空気に包まれる。その空気を振り払うように宰相さんが溜息を吐く。

「こりゃ参ったね～…、カレンさん…紅茶煎れてもらって良いかな？」

頭をかき、弱り顔の笑顔で、俺の傍で固まっているカレンさんに話しかけた。

「は、はい…申し訳ございません…ただいまご用意致します」

カレンさんも、その声で気を取り直したようにゆっくり立ち上がると、紅茶の用意をしにワゴンに向かった。

宰相さんは、俺の肩をポンッと軽く叩くと、

「まぁ、座ってお茶でも飲もうよ！あいつ、短気だしなかなかズバッ！と怒ってくれる人いなかったから…、驚いたんだろうな…しかも女の子に…」

思い返しているのか、クスクスと面白そうに笑ってカレンさんが煎れてくれた紅茶をすすっている。

…えぇっ！驚いたのはこっちだ！！しかも、驚いたというよりも…
…魔王降臨だったじゃないか～！！
慌てて、宰相さんに謝る。

「すっすみませんっ！めっちゃ怒ってたじゃないですかぁ…俺…ごめんなさい…お世話になりました…多分俺、追い出されますよね…」

人が怒るところをみると、冷静になるもので…不法侵入した上に仮にも世話になった人にとんでもないことを言ってしまった…はぁ～、ごめんなさい！ごめんなさいっ！

懺悔の気持ちでいっぱいになる頭を両手で抱える。

「う～ん、どうかなぁ～？良く、言ってくれた！って俺は思うからなんとかなるんじゃない？」

なんとかって……もう、嵐が過ぎたから興味なさ気な感じが宰相さんから漂っている。先ほどの慌て振りは何処いったんだ…、紅茶を美味しそうに飲んでいる。

「ちょっと、様子を見てきて貰えませんか…？」

頼みにくいけど…意を決して宰相さんをみてお願いしてみる。

「そんな、また可愛い！怯えた顔して！それはやめておくよ！今頃、暴れてると思うから～とばっちりはごめんだしねっ！」

…うぉい！サラっと恐ろしいことをニッコリ笑顔で断るなっ！と心の中で思わず突っ込んでしまう。

それに構わず、まぁ食べなよ？と食事の続きをすすめられる…。

もう～気になって食べられない…でも、最後の食事かもと思うと食べないともったいない！でも、明日から食べられなくなるかもしれない。

…しょうがない！言ってしまった言葉戻らない…。

明日、殿下に謝まってみて許して貰えなかったら出て行くしかないな……。

腹を決めると、腹を満たすために食事を続けた。

美味しいご飯（後書き）

駄々っ子坊やじゃん！！

ラブラブ路線にもっていけるのかしら……

最後の幸せ（前書き）

喧嘩は買いやすいのけど…人を怒らせたままだとめっちゃ気になるタイプです…

最後の幸せ

…ボフンっ…

結局宰相さんは、最後まで食事に付き合ってくれた後自室へ戻っていった。
カレンさんは食事を片付けるために部屋を出てき、それを見送ると独り部屋に残されベットにダイブした。

…お腹いっぱいだぁ～幸せ～…

幸福感に浸りながら、しばらくベットのフカフカ感を改めて味わうと殿下と言い争ったことを思い出し、

「まだ……怒ってるかな…」

ボソッ呟いてしまった弱気な気分をかえるためにベットから降りると部屋を一周しはじめる…。

「しかし…広くて豪華な部屋だ…俺の家の部屋を全部繋げたくらいある…おっ！トイレがある…。ゲゲッ！風呂もあんのかよっ！しかも広い…」

…俺の家風呂の3倍はあるんじゃないか…

しかも、いつの間にか浴槽にはお湯がはられ暖かそうな湯気が立ち上っている。

「カレンさん…いつの間に…」

カレンさんの働きぶりに感心し呟くと、…もしかしたらっ！戻れるかもっ！と期待をこめて、そそくさと裸になる。

…う～ん……戻れない…。
そう簡単には無理なのか…浴槽で潜ってみたり色々試したけど戻れそうもない…。

せっかくなので、頭と身体を洗い手探りでシャワーを探す。
…シャワー…シャワー…、なんとなくあるような気がしたけど…なかった…。慣れない手つきで洗面器ですくって流すと頭を振り、

「サッパリした！風呂は良いなぁ～！風呂ばっか入ってるような気もするけど…」

もう一度湯舟に浸かるが変化はない…。

「出よ…またのぼせたくない…」

脱衣所に向かうと服が用意されて脱ぎ捨てた前の服はなかった……！

「カレンさん、素早過ぎ…」

だらしなくて、スミマセン…と心の中で謝ると身体を拭き、用意された服に手を伸ばす。

…さっきまでの紺色のストーンとした服も良かったけど、今度は色が黒で良いし着心地もすごい！女の子はこんなに肌触りの良いもの着ているのか！！新発見だっ！

ウキウキしながら着替えて部屋に戻ると、カレンさんは部屋であの美味しかったジュースを用意して待っていてくれた。

「すみません…服とか…、お風呂もありがとうございます！……それと…さっきは、お騒がせしちゃってごめんなさい…」

色々申し訳ない気持ちでいっぱいになりその場で謝まった。

「大丈夫ですよ…でも…本当に気をつけてくださいね…殿下に御無礼な振る舞いをして切り捨てられた侍女や侍従から始め、大臣などもおりますから……」

カレンさんはニッコリ微笑むと、ゆっくりこちらに歩きながら心配した面持ちで注意を促してきた。

「切り捨てられるって…死刑ってことか！！」

……サァーと血の気がひくのを感じ……ブルッと身体を震わせると、カレンさんはタオルで俺の濡れた髪を拭き始めた。その手つきは心地好いけど不安な気持ちは消えなかった。

「カレンさん…カレンさんも俺のせいで恐い思いさせてごめんなさい…それに俺…多分…明日には追い出されるよ…優しくしてくれてありがとう…」

「まぁ、悠希様…そんなこと……殿下も…明日になれば機嫌も良くなってるかもしれませんよ…？」

「…そうだと良いけど…一応、明日になったら謝ろうとは思うんだ…無駄かもしれないけどグジグジするの嫌だし……！」

自信なさ気に苦笑いを浮かべる俺に、カレンさんが何か閃いたように、俺の顔を覗き込んできた。

「そうですね…では、こんなふうに謝ってみては……」

「…えぇ～っ！！それだけで許して貰えるのか……！やってみるけど……俺には無理…かと…」

ゴニョゴニョと耳元で囁かれた言葉を聞いて、簡単そうだけど…。本当に許して貰えるのか不安になりタジタジとカレンさんから後ろ歩きで離れる。

「悠希様ならできますよ！さぁ、歯を磨いてゆっくりとおやすみくださいね？」

キッパリと言い放つ自信がどこからくるのか全く解らない…。

……不安だ！逆に怒られるんじゃないか……困惑した俺に小さくガッツポーズをすると、カレンさんは部屋から出ていってしまった。

…言われた通り歯を磨き、整えられたベットにモソモソと潜り込んだ…。

最後の幸せ（後書き）

あれっ？……カレンさんとラブったらＧＬじゃない！
ダメダメ～！

殿下の苦悩（前書き）

ちょっと書きたくなったので書いてみました……

言い争い後の殿下です……

まだ良いと思っていましたが我慢できなかったんです（笑）

殿下の苦悩

……暴れたな……

一通り部屋のものに辺り散らすとさすがに疲れ荒々しく息を吐き出しながら、…ドカッ…！…乱暴に椅子に座ると乱雑になった部屋を見回す。

また…、シンの奴がうるせーな……それにしても！あのくそガキ！！この俺様に怒鳴りやがってっ！思い出して再び怒りが沸々と沸いて来ると…ダンッ！！…床を鳴らすと一先ず落ち着き…指を組んで頭をのせると溜め息をはく。

…久しぶりに怒られちまったな……女みてぇな顔して気が強くて…あっ…女か…一応…

思わず触ってしまった胸の感触を思い出し…フッと笑うと、何か気配を感じたのか顔をあげ扉にむかって声をかけた。

「おいっ…どーせ居んだろ…？……くるなら酒持ってこい…」

……ドアが開くと、チロッと舌をだしたシンが顔とワインを見せ

てきた。

「気がつかれちゃった～？相変わらず、野生動物みたいだね！あ～あ…また…凄い暴れたね～これでカーテンまで破かれてたら廃墟だね！明日は片付けの侍従が大変だ…」

シンは部屋に入ってくると、乱雑振りに可愛いそう～可愛いそう～、大変だ～大変だ～と…全然思ってねーくせに……軽く責めるように繰り返し言ってくる。
うるさそうに俺が聞き流しているとそれに気付き、

「可愛いそうと言えば…ユーキちゃん怯えてたよ～？魔王に追い出される～って泣いてたよ？どーすんの？君の様子みてきてって可愛くおねだりされちゃったっ！」

悠希の名前を出されピクリと反応すると、シンは羨ましいでしょ？君と違って俺には懐いてくれたよ？と得意げな顔をしている。

「誰が……魔王だ……」

得意顔が鬱陶しい……舌打ちすると、呟きながらシンを睨みつけるが効果はない。

君だよ君～と指を指しながら転がってるテーブルを起こし、グラスを置くとワインの栓をあけ注いだ。

「カンパーイっ！ワインは美味しいねぇ～、魔王だったよ～俺もビックリしたもん！ユーキちゃんも可愛いから迫力あったね～！で、謝るの～？謝るの～？」

勝手にグラス同士をぶつけると、興味津々な顔で身を乗り出してくるシンを手で押し戻し、

「うるせーな！！人で遊んでんじゃねーよ…謝んねぇよ…」

「じゃ、追い出すんだね～…」

酷い！悪魔だ！と攻めるような目でジッと俺の方をみてくる。…俺が悪いのか？……確かに悪かったかもしれねぇな……まだ、ガキ相手に本気になって…しばらく固まっていると低い声でボソッと呟く。

「……ださねー…」

「えっ！？何っ！？」

聞き取れなかったのかシンが慌てて聞き返してくる。

……本当に聞き取れなかったのかがあやしい……

「……追いださねーよ……自由に城ん中だったら動き回って良いぞ……って言おうと思ってはいたけどな……」

「まぁ！素直に言ったら良いんじゃなぁい？あっ！でもあんなに怯えさせたら近寄ってくれないかもね～」

…グサッ……

ん？なんで軽くショックなんだ……

「おっ？何々？ショックなの～？実はリュウ気に入ってんでしょ？俺はもう可愛いフィアンセがいるから！大丈夫！ライバルじゃないよ？」

親指をグッとむけてくる手を払いのけ、

「そ、そんなんじゃねーよ！！もぅ……出てけ……」

「都合が悪くなると、追い出すんだから…」

ブツブツ良いながらもニヤニヤしながらシンは部屋を出ていった…。

…チッ…

舌打ちをし、ワインをあけると部屋からバルコニーにでて夜風にあたる。

湯浴み場に突然現れたガキ相手に…俺は……あの細い手首を思い出す…軽々持ち上がって、皇太子という立場からやたらアピールしてくる女とは違う…そして俺に対してまっすぐに怒ってきたあの茶色の瞳を思い出す……シンの言う通りなのか……？

殿下の苦悩（後書き）

次からはまた主に悠希目線でお送りします

情報収集（前書き）

情報は大切ですよね…
ポイントとはなぞんぞや…と思って色々探しました！感想が2件だったのであぁ…自己満ですみません（笑）と思っていたらお気に入りに登録されている方がたくさんいて嬉しく思いました！

拙い文ですが、これからもよろしくお願い致します（（＿　＿））

情報収集

…何時だろう…

無意識に布団の上に何時もはあるはずの目覚まし時計を探す。

……んっ？……

手が虚しく空をきるだけで何も触れない…おかしい…身体を右によじる。

…ズルン…ガタッ…

世界がまわって目が覚めた。

「ん～……」

痛くはなかったけど……おぉっ！なんだ？部屋が広い…あぁ～そういえば……城にいるんだったな……。

欠伸をしながらノソノソと立ち上がると顔を洗いに洗面台に向かう…お前誰っ…鏡にむかい指を指し……俺だ…慣れないとっ！

ついでたからシャワーでも…あっ、ないんだった…ん？湯気？

お風呂はしっかり準備されていた。

……あぁ…カレンさんに寝相が悪いってバレたな…

ガクーと脱力しながら、ヘタリこむ。

朝風呂はなんとなく旅行にきたみたいだ！…うぉぉ～なんかテンションが上がる～と朝からはしゃいでしまった。

浴室からでると妙に張り切ったカレンさんが待ち構えていた…。

「悠希さま、おはようございます」

「うわっ！！ちょっと…カレンさん……」

自分は当然裸だ…恥ずかしさで元分身が存在していたところを抑え…あっ…ないんだ…とアワアワしてると大判のタオルで包まれた。

その後は……、着せ替え人形だった…。

胸あてというブラジャーみたいなのをつけられるのから始まり…嫌だ嫌だとごねては結局つけられ…パンツも心細いよぅ…布が少ない

…お尻は丸出しに近いし…。

…極めつけはドレス！ピンクは嫌だ～フリフリは嫌だ～とごねても、ニコニコなカレンさんは手早く着せると仕上げのリボンを背中で結んでくれた…。

「とってもお似合いですよ？本当に可愛いらしい…」

カレンさんは手掛けた作品の出来栄えに感動して満足したようだ。

…俺は朝から疲れた…

「別の服にしてくれ…」

と、カレンさんにお願いしてみても…

「ないんですよ～悠希さま小柄ですから選択できないんですよ～」

と返される。

でもっ！……サイズを測ったかのようにピッタリの服だ……ワザとだ……好みだ…部屋のすみで思わず体育座りをしていじけていると…、

「さぁ、朝食ですよ～！」

カレンさんは、クスクスと笑いながら餌づけしてきた。…観念して、引いてくれた椅子に座る

「いただきます！」

パンみたいなのフッカフッカだ～！焼きたてなんだなぁ～と感心しながら食べてると…カレンさんが不思議そうな顔で話しかけてくる。

「昨夜も思ったのですが…《いただきます》とはどういう意味なのですか…？」

「んっ？《いただきます》は食事の前に言うんだ！俺の国ではね…詳しくはわかんないけど…そのっ、食べ物の命を頂いてますって感じかな…」

お坊さんだったか…誰かが教えてくれた事を思い出しながら答える。

「なるほど…なんとなく解りました…大地の恵みに感謝みたいな感じですね…」

納得してくれたみたいで素敵ですね…と褒められた。
……大体の説明でごめんなさい…と恐縮し食事を続けながらついでに色々聞いてみようかな……

「そういえば…カレンさんはいくつなんですか？」

「私は３１歳ですよ…、因みに殿下リュ・クラウト並びに宰相シン・ナルセスは幼少期からのお付き合いで共に２６歳ですよ…」

「宰相さんは良いとして、殿下の情報はいいよ……」

ジトー…とカレンさんを観ると、

「何をおっしゃいますか…本日の作戦のためにも、色々殿下について知っておかないとダメですよ？」

まるで念を押すように言われ、あ…覚えてましたかとガックリとうなだれる。

「本当にやるの～っ！許してくれる前にまた、魔王になるよ…」

「大丈夫ですよ？身長差も幸してとっても良いと思いますよ？」

「カレンさん……楽しんでない…？」

俺の不安な気分を他所に、カレンさんはもう、作戦を決行する気満々だった。
すっかり仲良くなったカレンさんと楽しく？会話をしながらの朝食も終わり紅茶を飲んでノホホンとして待っているとカレンさんが片付けを終えて戻ってきた。

「お城の庭にでて散歩でもなさいませんか？」

「えっ！良いのかっ？外も良い天気だから出たかったんだ！」

まさかの誘いに喜んでいると、では…行きましょうと促され庭園に向かうことにした。

情報収集（後書き）

さぁ～妄想しましょう～！
やっとキャラクター達の歳が判明！！徐々に詳しくなっていくと良いですね…

やはり…日本人は…（前書き）

すみません…自分の知識のなさに…本当に拙い描写です……城に詳しくなっていけるように致しますので…お許しください…

やはり…日本人は…

凄い…こんなに広かったのか…

煉瓦でできたどちらかと言えばオーソドックスな四角い感じの城の場内には赤い絨毯がバシバシ敷かれ所々に人が集まっている。

……まるでゲームの中に出てくる城みたいだ……と思いながら良く観ると、牧師のような人から…ＲＰＧにはお決まりの騎士までいる。

うぉ～鎧だ鎧だ！とまじまじ観ているとカレンさんのクスクスと笑い声が聞こえそちらをみると、

「…さぁ、で…失礼…そろそろ庭園に行きましょう…こちらですよ」

ん？何か言いかけた…ような…気がしたけど差し出された手に、子供のように手をひかれ連れていかれる。

ちらほらと通り掛かる人から視線を感じ…

「なぁ…やっぱり…服が変なんだよ…すっげぇ見られてんだけど…」

「そんなことありませんよ？…きっと可愛いからですよ…」

コソッとカレンさんに不安そうに聞いたけどアッサリ否定されてしまった。

そぉかぁ～？……可愛いって言われても…困る…女の子になっても言われる言葉に大差はなかったな…やれやれと溜息を吐き出す。

「さぁ、着きましたよ…」

思ったより…近い…もう少し城の中を観たかったような気もしたけどカレンさんにそっと背中を押され、青い芝生の上に立つ。

一日ぶりの外は、清々しく思わず深呼吸し、しばし緑に癒される…と興味津々に周りをキョロキョロと観察し始める。

お茶を飲んでる人々もいたり、各々自由に過ごしているんだな…ん？あそこら辺で、女の人達が群れを作って騒いでるような気がする…。

「カレンさん！あの辺りに何か動物でもいるのか？」

女の人の群れを指差し尋ねる。

もし、……迷い猫とかだったら俺も触りたい！…比較的動物は好きなんだけど、一応家が食堂だったから飼いたいとは言えなかったしなぁ～と思い出しながら期待感にカレンさんの返事を待たずに近づいていった。

……猫じゃない……

…虎だ…虎に女の人が餌づけしようと奮闘していた…

「あっ…殿下と宰相様ですね…」

俺の後を着いてきたカレンさんが、女の人の群れを覗きながら…今…、返答してきた…。

……カレンさん…早く言ってよっ！……

心の中で突っ込んで固まっていると、こちらに気がついたように宰相さんが手を振ってきた…！

…気づかれてしまった……

仕方なく苦笑いを浮かべ手を振り返し、カレンさんは一礼する…。

……当然ながら、女の人達が邪魔してくるんじゃないわよ～と視線を送られた。

忙しそうなので…さいなら～…姿を消そうとすると、宰相さんがとんでもない事を口走る。

「今日は、ユーキちゃんと約束してるからまたね～？」

……はっ？

宰相さん……何言ってるんですかぁ……呆気にとられ目が点になった。

「ユーキってどなたですの？」

「私達もご一緒したいですわ～？」

派手に着飾り、胸をこれでもかっ！と強調した女の人達もなかなか引き下がらない…。良しっ！頑張れっ！俺は去る理由にしたいっ！願いをこめて様子を見守る。

「ん～……」

宰相さんが困ったようにしていると…

「朝から、やかましい……！さっさとどっか行けっ！」

遂に、鬱陶しいそうな顔をして虎が吠えて……申し訳ございません…と、女の人達はそそくさといなくなる。
…それに機嫌が悪い殿下からとばっちりを受けたくないのだろう……。お茶会をしていた人々もいなくなりあっという間に……、

「凄いね…殿下の一喝で、誰もいなくなっちゃったね～！貸し切りだぁ～」

宰相さんは感心しクスクスと楽しそうに笑っている……。

「てめぇが大体…時間潰しにって話しかけたのが始まりだろーがっ！！」

殿下は、腕を組みながら青筋を立てて宰相さんを睨みつけている。
だってさ…と宰相さんが口を尖らし、うるせーと殿下が返すやり取りが行われている。

この、どさくさに俺も逃げたい……逃げる方法を模索していると、カレンさんが目配せを送ってくる…へっ？なんだ？……カレンさんはコソッと呟いてきた。

「今がチャンスですよ…悠希様…」

……今っ？このタイミングで、やらせる気かっ！……カレンさんを凝視する。確かに、謝るとは言ったしな…良し！…カレンさんも大丈夫ですと頷いて応援してくるので、怒りＭＡＸの殿下に怖ず怖ずと話しかける。

「殿下…」

覚悟を決め、殿下を呼ぶと……トコトコと近くにより、今日も真っ黒な服の裾をチョンと掴み…顔を見上げる…

「話しがあるんですが……」

「なんだっ？さっさと言えっ！！」

不機嫌な顔で見下ろされ、さらに唸り声のように威嚇された。

…うぉぉ〜！！めっちゃっ…めちゃくちゃ機嫌悪いって…無理だぁ〜！追い出される〜！もう！これしか…これしか思い付かない…

さっ！と殿下の足元で正座すると、息を吸い込み…

「昨夜は、大変失礼致しましたぁ〜！」

頭を、地面スレスレまで下げる……そして、下げたまま言葉を続けた。

「見ず知らずの俺に、良くしてくれたのに…喧嘩を売るような真似をして申し訳ございません！…追い出さないでください！何でもします！ここに置いてください！」

……もう生きていくためにはここにいないと無理！…

必死になった俺は、完璧な土下座をした。

やはり…日本人は…（後書き）

やっぱり…土下座ですよ…

殿下の苦悩２（前書き）

また…書かないといられなくなりました！

句読点に気をつけて、読み易さを考えてみましたが…どうなのでしょうか？

殿下の苦悩2

……おいおい……何の真似だ……

意味が解らず複雑な表情で土下座する悠希を見下ろす。

シンとカレンを交互に目だけ動かしみると、シンは口元を抑えながら笑いを堪え、身体が震えている。……この状況を楽しんでいやがる……、カレンはオロオロと、俺の顔色を伺いながら、こんな予定じゃなかったんですよっ！と、言いたげにどうすれば良いのか悩んでいるようだ……。

俺も……困るぞ…大体なぁ…手で頭を触りながら、

…ジロリ…

シンを睨みつけ、朝からの出来事を思い出す。

◆◆◆

「おはよう〜！殿下っ！気持ちの良い朝だね！庭園に、散歩に行こう〜！」

朝早くから、俺の部屋に勝手に入ってきたシンは、爽やかな笑顔を向け、カーテンを開ける。

……迷惑だ……太陽が眩しい…

「いきなりなんだ…？いかねーから……勝手に行ってこい……」

寝起きで掠れた声で素っ気なく応えると眩しさから逃げるように寝返りをうった。昨夜は、色々考えてしまいなかなか寝付けず寝足りない……。

「ユーキちゃんに謝るタイミングをあげないと〜！ユーキちゃん……気にして、昨日は眠れなかったみたいなんだよ…カレンさんも、協力してくれるから庭園に行こう〜！」

ペシペシと俺を布団の上から叩いてくると布団をめくられてしまった…。

…あいつもそうなのか…何だか…、まるで俺が虐めたみてぇに、責

めんじゃねぇよ……怒られたのは、俺の方だろが……ブチブチ言いながらベッドから起き上がると、シンがからかってきそうなので、渋々支度するフリをし、シンの後をイソイソと着いて庭園までやってきた…。

視線であいつを探すが、…まだいねぇみたいだ…

「まだ、きてないみたいだね～？そこら辺の彼女達と話してようか？」

残念でしょ？と言いたげに微笑するとスタスタと女の群れに話しかけて行ってしまった。

シンが愛想良くするもんだから…案の定…うるせー女が寄ってくる。……イザベラとその他だ…何回か、夜伽に呼んでから、やけに馴れ馴れしい……ずっとシンに相手を任せ…城からの庭園の入り口を、つい気にしてみてしまう。

……来た……

しばらくすると、カレンと一緒に入ってくる…遠目からも、はしゃいでキョロキョロしているのが解る…。…フッ…と思わず顔が緩む

…。すぐに顔を引き締めるがイザベラに気付かれたのか…やたらうるさい…気分が滅入る…気が強そうな所が気に入っていたが……今はうるさいだけだ……しつこい……沸々と怒りが湧いてくる。

女達を追い払ってから、シンと話していると、

「殿下……」

心地好い声で呼ばれた後に、あんな！！可愛い仕種で……！！思わずドキリと心臓が弾んだ。

昨夜は俺を睨んでいた瞳が…怖ず怖ずと俺を下からみつめてくる……、しばらくみつめていたかったが、つい照れて…ごまかすように怒鳴っちまった……。

◆◆◆

その後、「ごめんなさい…」　って言ってくんのを待っていたのに…急に、俺の足元で膝まずいている……コイツの国の謝り方なのか、唖然と見つめる。

……俺も謝れるかと思ったが……これは真似できねーぞ！……

……絶対に無理だ……

しばらく考えた後…、足元にいる悠希の腕に手を伸ばし……ひっぱりあげた…。

殿下の苦悩２（後書き）

短めですみません…

男に二言はないっ！（前書き）

お待たせ致しました…相変わらず、拙い文章ですが…読んで頂き、ありがとうございます！

男に二言はないっ！

……まさか！……無反応っ！？

とりあえず土下座したものの、許して貰わなければ身動きがとれない…、柔らかい芝生の上とはいえ、足が痺れてきたんですけど……、足が一回り大きくなったような……頭のなかは、雑念が渦巻いている。

「うわっ……」

急に腕を捕まれると、上に引っ張られる…立たせようとしてくれているのか、勢いにまかせ立ちあがりながら……目の前の殿下と一瞬目が合った。

……でもっ！今は……足が言うことをきかない……！腕をまだ捕まれているから転ばなかったけど……フラフラしては…ビクッと足が勝手に身体が反応してしまう。

「おい…、ふざけてるのか……！」

頭上からは怒鳴るような声が聞こえて、慌てて弁解しようと口開く。

「違っ…！！足が……っ！」

言うことを聞かない足でバランスをとろうとし、うっかり足が地面に触ると電気が走り言葉が途中で切れてしまった。

「……怪我でもしたのか…？」

「さ、触るなっ！！」

殿下の手が、俺の足を触って様子を観ようとするけど…ビリビリと電気が走るだけで思わず手を払いのけてしまった。

……あっ…しまった……

また…怒らせた…？　外の温度が下がっているような気がする…そのかわり、捕まれた腕が熱い……っ！溶けるかも…恐くて殿下の表情もみれないで俯むくしかない。

「足が痺れちゃったんだねっ？大丈夫？」

天の声～！声をかけてきた主の方に顔をむけフラフラしながら応える。

「そうなんだ！宰相さん！……足が言うことときかないんだ…」

軽く殿下にも弁解の気持ちが伝わったのか、少し空気が和らいだような気もし安堵する。

「大丈夫ですか…？」

カレンさんが心配そうに俺を覗くと、身体を支えてくれようと手を延ばしてくるが、その手は俺に届かなかった…。

身体が宙に浮いているような…足は楽になったけど……何が起こったのか解らない。

「わぁ～、お姫様抱っこだね…良かったね～！」

宰相さんは一瞬、殿下がこんな事を？と驚いていたけど直ぐに目を輝かせ頭を撫でてくる。

「あらっ…！」

カレンさんも驚いた顔をしたけど両頬に手を添えて、頬を染めてこちらを見つめている。

……二人の反応は、ほのぼのとしているけど…これは、恥ずかしい…！女の子にするならともかく…、男にされても嬉しくない…！嫌がらせか……？

「殿下……、さっきは心配してくれたのにごめんっ！俺、足が痺れただけだから…降ろしてくれ！…じゃない…降ろしてください…」

また怒らせては、謝りにきた意味がないし…、俺なりに精一杯お願いしたつもりだが……はて？降ろしてくれる気配がない……殿下の顔を見上げる。

「……」

「……」

……何も言わない…俺の顔をみてるだけだ……何を考えているのか全く読み取れない……じっと観ていると、咳ばらいが聞こえそちらをみることにした。

「……あのね～、見つめ合ってるところ悪いんだけど……、そろそろ本題に、はいっても良いかな～？」

本題…？もう、謝ったし俺には関係ないっぽいな…、あっ、殿下に謝って貰ってないっ！それだな…でも、謝るわけないよな…首を捻り考え溜息を吐く。

「殿下……ユーキちゃんに謝ってないでしょ？」

宰相さんが催促するように殿下を観ながら言うと、

「……悪かったな…、それに…ここに居ていい…」

チラリと宰相さんをみたけど俺を見下ろし、謝ってきた…めっちゃ

不機嫌な声で…、謝られた気がしないけど、突っ掛かると良くないからな…にっこり笑う。

「謝ってくれて…、ありがとうございます」

「さて、もう二度と殿下が、食べ物を粗末にしないたもにも…、ユーキちゃんを、殿下の食事管理士に任命します！おめでとう！」

宰相さんが手を叩き、つられてカレンさんも手を叩いている……。

「出て行かなくて大丈夫になったことだし…、お給料もでるよ？」

「やりますっ！！」

俺は即答した。
食事管理ならなんとかなるしっ！出ていかなくなっても、ただ飯食らいは嫌だ。それに…やっぱりお金は、いざというときになければ困る…。

「良かった！引き受けてくれて！」

宰相さんはニコニコ頷いて俺の手を握ってきた…でも直ぐに殿下が身体の向きを代えてしまい離されてしまった。

「……俺は嫌だ……」

黙ってきいていた殿下が宰相さんを睨みつけている。

「さっき…何でも言うことを聞くって言ってたよな…？だから…仕事なんてすんじゃねぇ……」

俺の顔を観ながら脅すように言ってきた。

俺の仕事を取り上げる気だ…！なんつー嫌な奴！
口を尖らし不満な顔をすると慌てたように宰相さんが殿下に向かって、

「ちょっと、待って……殿下……！ユーキちゃんの仕事を取り上げちゃうの？こんなに、殿下のためにやる気になってるのに……」

宰相さん……なんて良い人っ！！ありがとう！
心の中でお礼を言い、両手を握り浮かれていたら、殿下はムスッと

した顔で頷くと俺を見下ろしながらとんでもないことを言ってきた。

「……解った……じゃあ、お前も女らしくなれっ！」

「えっ……何てこと言ってんだ！！俺…嫌だ…

突然降り懸かった火の粉を払うように慌てて首を横に振る。

「…嫌だぁ…？お前…言ったことが守れねぇのか？」

再び、脅すように睨みつけられ落とすぞと言わんばかりに身体を揺らされる。

持ち上げられたままの身体を落とされてはたまらないと殿下の二の腕を掴むと揺れが治まる。

負けじと殿下の目をみつめて、

「……わかった…男に二言はないっ！！やってやるっ！」

俺は…つい…宣言してしまった…。

言葉使い……（前書き）

わたしも、言葉遣いで怒られてました……から、今も…たまに…

悠希…頑張って！

言葉使い……

……あぁ～、何ていう約束をしてしまったんだ……後悔しかない…

庭園で女の子らしくすると、売り言葉に買い言葉で宣言してしまって自室に戻ってきてからは、ため息しかでない……！

大体…殿下め～！なんて条件だ～！殿下は、ご飯を食べれば良いだけで、俺は話し言葉から仕草までで、割に合わないじゃないか～！

宰相さんはあの後…、殿下と仕事があるからカレンさんに、「よろしくね～！ユーキちゃんお昼は一緒に食べようね～！」と、言って何処かに行ってしまった…。

カレンさんも…、「はい！お任せ下さいっ」と、張り切っていたし、味方はいない…。逃げ場はない…！

……コンコン……

「へぇ～い……」

椅子に座ったまま気の入らない返事をすると、カレンさんがお茶の用意をして入ってきた…。

「まぁ、悠希様…、そんな格好してはいけませんよ？椅子が、ひっくり返ってあぶないですよ？」

両腕を椅子にかけ、後ろに体重をかけているとカレンさんは学校の先生みたいに注意してきた。……慌てて姿勢を正す。

「悠希様は、可愛いので今の姿勢の方が良いですね。お茶になさいますか？」

よく出来ましたと、ニッコリ微笑むとお茶の用意をし始めた。
俺も、ニコニコしながら答えた。

「飲む！飲む！」

「……悠希様？…“頂きます“…ですよ？」

みたいじゃない！……学校の先生より、恐いかもしれない！逆らえ

ない……何か威圧を感じる…。相変わらずニッコリ笑ったままの顔なのにっ！

「い…頂きます」

慌てて俺が復唱すると…普通に、にっこり微笑んでお茶を入れてくれた…。うぅ……もう気が抜けない…。

「カレンさん……俺……女の子らしくしないとダメ？」

「“おれ“より、私の方が悠希様に似合いますよ？」

女の子らしく小首を傾げてカレンさんに尋ねたけど…カレンさんは微笑みを浮かべたままサラリと交わされてしまった……。

「……、わ…私……恥ずかしい…んだけど…」

「キャー！悠希様！可愛いですわっ！」

言いづらさとむず痒さでもじもじしながら言うと、急に…カレンさ

んにギューっと抱きしめられる。

カレンさんが壊れたっ！本当は、こんな人だったのか……ってか…胸に顔が…押し潰されてっ！息が出来ないっ！

カレンさんの背中をぽんぽんと叩くと離れ、新鮮な空気を肺いっぱいに吸い込み息を整える。

「プハっ！……苦しいよっ！…カレンさん…」

「申し訳ございません…悠希様、とても可愛かったものですから……」

恥ずかしそうに謝ると、ウットリと俺をみつめてくる。

…困った…良く出来たってことかな？……

煎れてくれた紅茶に手をのばし一口飲み。

「カ、カレンさん…とっても…美味しい……ですわっ！」

慣れない言葉遣いで、あまり心が込められなかったけど…カレンさんをみて、にっこり笑いかけてみた。

「悠希様……とても良いですわ…」

褒められて嬉しいはずなのにまるで俺じゃないみたいで思わずため息をつくと、カレンさんが言葉を続けてきた。

「ですが…、悠希様……。全てを、変えなくてもよろしいのではないでしょうか…？元気な、明るい悠希様らしさを残して話しましょう？」

カレンさんも、俺が無理しているとわかったのか様子を伺うように提案してきてくれた。

…俺らしさって…どんなだろう……

少し考え、もう一口紅茶を飲んでからカレンさんの方に顔だけ向けて、試しに言ってみることにした。

「カレンさん！とっても美味しいよっ！」

すると、カレンさんは嬉しそうに頷きながら、

「はい！ありがとうございます。……悠希様らしくて、とても素晴らしいですよ？」

「本当かっ！？」

なんか！認めて貰ったみたいで嬉しくて聞き返す。

「……」

カレンさんはニッコリ微笑んだまま返事が返ってこないのでもう一度言い直し、

「……本当？」

「はい！本当ですよ？」

今度は嬉しそうに返事が返ってきた。

……一回、聞こえない振りをされたけど……何となくコツが解った！

「悠希様…、無理せずに頑張りましょうね…」

カレンさんは、しゃがむと俺の顔を心配そうに覗き込み、俺の手を包み込むように両手で握ってきた。

「大丈夫だよ？カレンさんっ！何となくコツが解ったから！…お…じゃないや…私…、頑張れそうだよ？」

俺が笑顔で返すと、カレンさんは安心したように微笑むと立ち上がる。

…まだ、ぎこちないけどやるしかないし！どうせやるなら…殿下をギャフンと言わせてやる！…

うまくいった時の殿下の表情を想像してやる気を燃やしていると…

…、

「お茶のお代わりは如何ですか？」

カレンさんはティーポットを持ち上げながら聞いてきた。

……えっ…、テストみたいだけど……カレンさん…

カレンさんの方をみると、いつも通り優しく微笑んでいる。

…その、笑顔が……恐い…

「の…、じゃない…頂きます」

……暖かい紅茶がカップに注がれた…。

言葉使い……（後書き）

セリフが、あまりにも男言葉だと……ＢＬみたい…になる…いつか、書きたいですね…（笑）

一週間後……（前書き）

繋ぎなので…短いです。

早くラブラブしてほしいのに！なかなか、道程が遠いっ！

一週間後……

「もう…ユーキちゃんがきて一週間たつね～！殿下もご飯食べるようになったし…、俺嬉しいよ～！何気に楽しみでしょ？」

部屋で黙々と仕事をしていると、シンが退屈になったのか書類を手に持ったまま顔をあげて話しかけてきた。

「……んなことねぇよ…」

食事の時の事を思い出して、惚けて顔が緩みそうになるのを隠すように素っ気なく応え、顔をシンから手に持った書物に視線を移す。

当然書物の内容など頭に入ってこずに、もう……一週間になるのか、…カレンに教えて貰って大分女らしくなってきたな…。相変わらず、生意気なのは変わらねぇが…。

悠希の最近の様子を思い出して口の端を歪めてニヤリと笑う。

「ユーキちゃん、女の子らしくなってきて嬉しいんでしょ？……でもね～、最近心配なんだよ……、お城での生活に慣れてきたみたいであっちこちウロウロして探検してるみたいなんだけど……

ちょっと……凄く悪いこと考えてる顔してるよ……」

シンは、心配そうに苦笑いを浮かべながら話していると俺の方をみて呆れた顔で失礼な事を言ってきた……。

「なんだ……？」

そんな顔してねーと口元を真横に戻す。

…そういや～良く城の中で逢うな……、俺にあってもビクつかねーで最近話しかけてくれるようになったしな……、と思い出しては再び口元が歪む。

「ユーキちゃん……可愛いじゃない？不埒な事考えてる人もいるんじゃないかな～？殿下と同じように……」

「ばっ……馬鹿な事言ってんじゃねぇっ！！俺は……」

ニヤついている俺に向かいチラリと横目でみてくるシンの視線に慌てて否定し椅子から立ち上がる。

…でも……確かに……気がつくとみてる奴が多い……あいつしかみ

てないから気がつかなかった……。

「……まぁ、それはともかく…ちゃんと殿下のものって宣言しないとあぶないよ～！ユーキちゃん、気さくに色んな人に、話しかけてるから……親しみやすいってさ！それに比べ……最近は殿下……イザベラとかにも冷たいでしょ？嫉まれてるよ～恨まれてるよ～」

……俺にはあまり話しかけてこないのに……そうなのか…軽く心に刺さるような事をサラリと言われたような気がしてるとシンは、どうでも良い女の事を思い出したように言ってきた。

「……さぁな…、忘れたそんな女……で、どうやってだ……？」

……コイツの事だ何か良い考えがあるに違いない……さりげなく聞いたつもりだったのに、気付かれたみたいにニコニコと笑顔を浮かべ、

「おぉ～、ついに認めたね…！良かった、良かった！素直な態度が良いと思うよ～！ただでさえ、解りやすいけどね！そうだね～何か…殿下直々にプレゼントをあげたら？」

拍手し、満足そうに頷きながら腕を組むと悩む振りをしながら案を言ってきた。

「うるせーな…プレゼントか……」

悠希を思い浮かべながら真剣に考えていると、

「本当に……素直になっちゃって可愛いなぁ～殿下！」

シンは、沁みじみと良いものを観たと言わんばかりの笑顔を向けてくる。

「あぁ？……やかましいっ！…ほっとけ！」

手でシンを追い払うような真似をし、…にしても……、護衛くらいつけておいた方が良いのか……それとも……と、少し考えているとシンが呆れたように、

「殿下がついてまわるのは、やめておいた方が良いよ！絶対、嫌われるから～！」

……心を見透かされ、近くにあった本を宰相に向かって投げつけた。

「そんなことやんねーよっ…！！」

事件（前書き）

はぁ……何か何か起こさねば…！
悩みました（笑）

事件

カレンさん……容赦ないよぅ……
姿勢が悪いからって頭に本をのせて歩かされたり…挨拶は大事だからと、首の角度が悪いと注意されて良く出来ればカレンさんは、壊れて歓喜して抱きしめられるし……

「はぁ〜、疲れた……」

ちょっと、カレンさんの目を盗んで部屋から抜け出し脱出して人気のない所までくると座り込み、溜息をつく。

でも、そのおかげで……悲しいのか嬉しいのか解らないけど、女の子らしくなってきて殿下に飯を食べさせる仕事も、こなせてきた…胡散臭い仕事だけど…お金貰えるし……それに殿下をたまぁに見ると、良い顔して笑ってるんだよな…、何か獰猛な動物を餌づけしたみたいで……楽しくなってきた…。

殿下と一緒にご飯を食べることも、すげぇ嫌だったけど…独りでご飯を食べるより、何倍も楽しくて美味しい…。

大人のくせに野菜が嫌いとかで食べないから、料理長さんに頼んでポタージュを作らせて貰ったら、黙って空になった皿を渡してきてお代わりまでしてきた。

野菜のシャーベットを、作ったら驚いてまじまじとみていたなぁ…。
思い出すと楽しくてもっと殿下を驚かせたくなってきた。

「そうだ！日本の味を教えてみよう！」

すくっと立ち上がると…厨房の料理長の所へ向かうことにした。
時々擦れ違う人と挨拶をかわし、近道をしようと庭園を抜けようとした所で、声をかけられ足を止めた…。

「いっ……」

首元に激痛が走り、気がつくと乱雑に散らかった部屋にいた……。

「首が……。ってかここどこ…。資料室みたいだけど…」

痛む首をさすりながら立ち上がると周りを見回し、ドアに近づいて開けようとするが……開かない……。

「鍵が閉められてる……、誰か気がつかないで閉めたのか……いや、

そんなはずない……だ、誰か！誰かいませんかっ？」

返事はない……資料室はシンと静まり返り、段々と恐怖感に飲み込まれそうになる……どこかに窓か、抜け出せそうな所がないか探すことにしようと、ドアから離れた。

「……な……い」

日が差し込む所がないのだから窓などなく、埃っぽさとかび臭さで、気持ちも悪くなってきた……。
ふと、ドアが開く気配がしたような気がして、ドアの方に視線をむけると男の人が立っていて声をかける。

「……あっ！助かりました…！閉じ込められちゃって……」

城の中では見たことない人だけど……助かった！

近づいて行くと、突き飛ばされお尻から転ぶと俺の上にのしかかってきた！
痛っ……恐いっ…身体を起こそうとするが起こせない。

…足を動かしたり何とか抜け出そうともがいていると、頬が熱くなり頭がクラクラした……。な、殴られた……？

「大人しくしろっ！！まだ、殺さないだけありがたいと思えっ！」

大人しくしろと言われて、大人しくなど出来るはずがない！
もがいても力じゃ全く抵抗できないと痛感し、首筋を生暖かい舌で舐められると、ゾクッと鳥肌が立ち…恐怖で頭がいっぱいになる。
…声が出したくても声がでない…

「諦めたか……金を貰えてこんな可愛い子とヤレるなんてな……」

スカートから男の手が入ってきて太股を触ってくる。
気持ち悪いっ！気持ち悪いっ！もう……吐きそう……押し倒してくる男を手で押し退けようとするがびくともしない……もう……駄目だ…、もっと力があれば…女の子になんかならなければ……手で周囲を探ると固そうなものが触った……。

「……いっ…痛ってぇ…このやろう…待っ…」

本の角が、男の頭に当たったのか怯んだ隙に逃げようと心みるが…
……手首を掴まれ引き戻されてしまった。
…胸元を乱暴に開けられ身体の震えが止まらない……。

……ドカッ！！……

ドアが急に失くなり、ドアがあった所からは、黒い長い足がみえる。
乱暴に蹴破らたドアの方から新鮮な空気と光が入ってくる…黒ずくめの男がこっちに向かってくる……。

「……貴様…！」

怒りの篭った低い声で男に呟くと、冷たい凍りつくような目で見下ろしてきた。

「で、殿下……」

俺を襲っていた男は恐怖で声が震え、顔を引き攣らせている…。
殿下は足で乱暴に男を蹴り飛ばすと、壁に打つかったのか動かない男の頭を足で踏み付けている。虫でも踏み殺しているみたいだ……。

ゆっくり起き上がった俺の…瞳から涙が出てくる……止まらない……。
泣きじゃくるわけでもなく静かに涙が頬を伝って流れていく。

その様子をみた殿下は、歯をギリリと音がでるほど噛み締め、もう2、3回…憎々しげに男を踏み付けると、そっと俺に近づいてきた。
俺が手を恐る恐るのばすとそっと抱きしめてくれた……。
恐怖の変わりに、安堵感に包まれ俺も抱きしめ返した。

…助かった……

気が抜けたのか意識が遠くなっていった。

事件（後書き）

サラリと流してください…本当に拙くて申し訳ないです……。

殿下の激怒（前書き）

前までをリニューアルしてました…。遅くなり申し訳ありません。

相変わらず拙いですがよろしくお願いします。

殿下の激怒

……あ……

自室から議事堂へ繋がる三階の渡り廊下をシンと移動していると、庭園を走る悠希の姿をみつけ足を止め、じっと見つめた。シンも、つられて足を止め俺の観ている方に視線を移す。

「あ〜！ユーキちゃんがいるよ〜？」

「アイツ……カレンから逃げてきたなっ……」

ボソッと呟く……今頃は、カレンのレッスン中のはずなのに、しょうがねぇ奴だ……。

「だよね？後で、カレンさんに教えてあげよう〜！…さっ、もう行くよ？」

シンは、しょうがないなぁと、クスクスと笑いながら議事堂へ向かい歩き始めた。

視線を悠希に留まったまま俺も、渋々歩き始める。

その時、悠希が足を止め誰かと向き合うと急に倒れ込むのが見えた。

……？…なっ！！……

「おいっ！シンっ！」

「ん？どうしたの？」

庭園を凝視しながら、シンに向かって声をかけると、シンも庭園を慌てて覗きこみ、悠希がそのまま担がれ何処かへ運ばれていくのを観てしまった。

「……チッっ！…！」

舌打ちすると、庭園の方へ向かうため向きを変え急いで走りだすと、後ろからシンの慌てた叫び声が聞こえてくる。

「あっ！！リュウっ～！殺すなよ～っ！」

殿下はあっという間に姿がみえなくなってしまった。

「はぁ～、何処に行ったのかも解らないのに～！せっかちめっ！」

宰相は困ったように頭をかきながら溜息を吐くと、悠希を担いだ男が向かう先を渡り廊下から見えるだけ視線で追い、大体見当をつけると急いで殿下の後を追いかける。

……何処のどいつだぁ……みたことねぇ男だった……

男の様子を思い出し、奥歯をギリリと悔しそうに噛み締める。
擦れ違う奴らは、皆小さく悲鳴をあげて道を空けていく。
庭園の周りに着くと周りを見渡し、通りかかった貴族に悠希の目撃情報を聞いてみることにした。

「おいっ！悠希みなかったか？」

「……すみませんっ！」

殿下の、般若のような形相に貴族の皆様は驚き固まっては逃げるの繰り返しだった…。

役立たず共に苛々し、乱暴に壁を蹴り飛ばしては当たり散らしていると、後方から声が聞こえ振り返る。

「だから〜、急いでも無理だって……気持ち…わかるけど…」

シンが荒くなった息を整えながら、苦笑いを浮かべて後ろに立っていた。

「とりあえず、城外には人を出さないことにしてきたよ」

「そうか……じゃあ何処だ…知ってんのか？」

シンに詰め寄ると胸倉を掴みながら睨みつける。

「お、落ち着けよ…？俺にあたるな…」

シンは、まぁまぁと俺を引き離すと、男が向かった先を想像しながら、

「おそらく…一階だよ…、人の出入りが激しくないとこと言えば……あっ！おいっ？

……資料室の辺り…ってもういない！」

殿下は、宰相が言い終わるのを待たずに目的地に向かい始めてしまった……。

静まり返った一階の奥の廊下に意識を集め、周囲の音を探る。

……なんとなくだが、ここかぁ……音が聴こえたような…

気になるドアを開けようとするが開かない。

「……チッ、鍵かぁ…めんどくせぇ……」

呼吸を整えると一気に目の前の邪魔なドアを蹴破り、かび臭い匂いが漂う部屋に入ると、その匂いに混じり微かだが悠希の香りがした……。

……悠希……

視線を感じ、そちらをみると悠希の上に男が馬乗りになっているのをみつけ、全身に血が沸き上がるのを感じた…。
詰めより男を見下ろすと、足で邪魔な肉の塊を蹴り飛ばした。
男の呻き声がし、動かない…。

……殺してぇ……

腰にある鞘に手を伸ばしかけるが、シンの言葉を思い出し肉の塊の頭を踏み付け、振り返ると服を乱し、頬を赤く腫らした悠希が目に入る。

……なっ…泣いてる…今まで泣いたことねぇくせに……もっと早くに、警戒していれば……

怒りが治まらず、苛々しながら、それを抑えるように足の下にある肉の塊を何度か蹴り上げる。

すっかり怯えきって悠希の目は開かれ、涙が止まらない。何と声をかけたら良いか解らない。
恐る恐る近づくと小さな手が力無くすがるように伸びてくるのをみて、思わず抱きしめてしまった。後悔と無念さに心が押し潰されそうだ……。

……悠希……酷いめに合わせちまってすまない……

抱きしめ返してくる悠希の体温と心臓の音を間近で感じ、とりあえず頭に昇っていた血が全身に行き渡っていき冷静を取り戻した。

意識がなくなった悠希を抱き上げ、動かない男を見下ろしていると宰相が兵士を連れてやってきた。

「ユーキちゃん……」

悠希の様子をみてシンは心配そうに俺をみてくる。

「大丈夫だ……部屋に連れていくぞ……」

シンは安堵して頷き、兵士に指示をだした。
兵士は男を引きずるように資料室から運びだし、その後にシンもついていった。

悠希の部屋に着き、ベットに寝かせると、カレンが悠希の身支度を整えていく……その手は、怒りと悲しみで震えているのか少し時間がかかっている。
静かに見守り、身支度が終わるとカレンは一旦、部屋をでていった。

頬を冷やしている悠希の顔をみながら、再び苛々していると、悠希の手が何かを探すように動き、俺は手を握りしめ悠希の目が覚めるのを待った。

殿下の激怒（後書き）

続きというより殿下目線なので……進んだ気がしない…（笑）

でもっ！書きたかったんです！

事件後……（前書き）

はぁ～、天気が悪くて嫌ですね…

事件後……

……手が温かい……なんだろう…

目をゆっくり開けると、ランプに照らされただけの暗い天井が目に映り誰も視界に入らない。外は、もう薄暗く今にも降りだしそうな空模様をしている…。
右手に温かい感触を感じ、そちらに目を向けると、

「……気がついたのか……？」

低く掠れるような声で殿下が話しかけてくる。握られた手が離され、掌は急に空気に晒され何となく寂しい気分になる。

「……殿下……っ！……」

…なんで……ここに…っ！と、言おうとして気付いてしまった……あの気持ち悪い男の感触を…。
殿下に背を向け、身体を守るように丸くさせる。

…恐い…恐い……もう嫌だ……帰りたい……、母さんに会いたい……皆になんて思われるのか……汚い……気持ち悪い…、思考が混乱し身体も震えが止まらないし止まっていた涙も再び流れはじめてしまったのがわかる。

「……大丈夫…です…助けて…くれてありがとう…ございました…」

自己嫌悪感から殿下の顔をみることもできず、搾り出すように言うと、しばらく重い沈黙した時間が流れた後、殿下から舌打ちが聞こえた…。

「……大丈夫じゃねぇだろ…？」

殿下の声は、苦痛にでも耐えるかのように微かに震えていた。

その声に、身体がビクリと反応してしまい布団で目を擦り深呼吸して息を整えると、心配かけまいとゆっくり起き上がり殿下をみて作り笑いを浮かべ、

「……殿下、大丈夫ですよ？お、私……心配かけて、…す……」

……すみませんと続ける前に、殿下が俺の頭を掴むと胸元に引き寄せられた。

……驚いて身体を引き戻そうと両手で殿下の胸元を押しながら、

「……離してくださいっ！…、汚れて…ます…っからっ…」

「……汚れてねぇっ！…から…」

頭上から、殿下の唸るような怒り声が聴こえビクッと身体が硬直してしまい震える声で泣きじゃくりながら吐き出す。

「俺…もう…此処には居たくない……帰りたい…」

「そんなこと言うんじゃねぇ…！……もう二度とこんな目には遭わせねぇから…」

殿下に、身体を引き戻され力強く抱きしめられると守られているような安堵感から、震えがやっと止まった。
そのまましばらく胸元で一通り泣くと気分も落ち着きはじめ、一呼吸つくと抱きしめられていた手が緩んだ。顔を見上げると殿下は、舌打ちして立ち上がる。

「……っ、もう寝ろっ？そんで、忘れろっ！」

頭を撫でられ、部屋から出て行こうとドアに向かって歩きはじめていた。

……えっ！なんで？……

ベットから起き上がると、急いで殿下の後を追う。

……独りに、しないでくれっ……

そんな甘えた事言えない…服の胸元を握りしめ立ち止まる。

それに気付いたのか殿下が足を止め、怪訝そうに俺をみている。

「……なんだ…？」

「……なんでもないです……」

足元を見下ろしたまま固まっていると、俺の所まで殿下が戻ってきて頭をまた撫でながら、

「……また、寝る前にきてやるから…ちょっと待ってろ…」

それだけ言うと、踵を返して部屋から出ていってしまった。

独り部屋に残されると心細さが増してくる。
あの襲ってきた男に触りまくられ気持ち悪い身体を洗いたくなり、浴室に向かった。

丁寧に身体を洗うとすべてを洗い流してしまいたくて、お湯を頭から被り何度も洗っては流すを繰り返した。
やっと浴室から出て部屋に戻るとやっぱり、カレンさんがいた。

「……悠希様、私が目を離して…申し訳ございません…」

申し訳なさそうに下を俯き頭を下げている。

「……カレンさんの所為じゃないよ…私が逃げ出したからだから気にしないでよ！」

カレンさんの近くまで歩いていき笑いかけると、優しく包まれるように抱きしめられた。

「無事で何よりです……本当に申し訳ありません…」

抱きしめてくるカレンさんの背中を軽く叩きながら、

「もう、大丈夫だよ？カレンさん！触られたくらいだから……もう、忘れるよ！」

「……悠希様……」

カレンさんは、抱きしめを解くと俺の顔を心配そうにみてくる。そのカレンさんの目には、泣いたような後があったけど気がつかない振りをすることに決めた。

……もう、大丈夫だしっ！未遂だったし！俺も沢山泣いてスッキリした！……

「それより、カレンさんっ！お腹空いちゃった……夕飯食べたいなぁ～？」

カレンさんは、暗い顔をしていたけど俺がお腹を抑えている姿をみてやっとクスリと笑みを零してくれた。

正直、あまり食欲ない…とか思っていたけど、相変わらず美味しくて食べてしまった。

俺って案外図太い神経なのかもと苦笑いをし、寝る仕度をして布団に入ると、ノックが聞こえた。

事件後……（後書き）

普通、そんな目にあったら直ぐには立ち直れないと思いますが…立ち直ってほしくてサラっと立ち直らせました（笑）

情けは無用（前書き）

う～ん……最近、殿下の心情多いかな……

でも！書きたいんです！申し訳ございません……

情けは無用

……まいった……

悠希の部屋から出ると、その場にヘタリこみ深く溜め息を吐き出した。

……すっげぇ、卑怯だ……抱き着いて離れると相場ではキスの一つでもすんだろーが…、あんな事のあった後じゃ……出来るわけねぇ…だろ……、それなのにめっちゃ可愛く見上げられて……俺は耐えた…。

下がってくる頭を両手で支えながら俺は思わず、もう一度深い溜め息を吐くと立ち上がり、城の地下を目指して歩きはじめる。

……にしても…あの男め…ぜってぇ、ゆるさねぇ…

煮え繰り返りそうになる怒りや悔しさなど、様々な感情に、飲み込まれそうになるのを耐えつつ地下の一室の前に着くと、いつものような木のドアではなく重苦しい鉄の扉を開けた。

「……どうだ？」

扉の向こうには、珍しく真面目な顔のシンと恐縮した顔の兵士ニ人が居て俺をみてきた。

その三人の中央には、椅子に縄で縛り付けられ拘束された男が萎縮しきっていて、俺に気がつくと懇願するように叫んだ。

「……殿下……本当にっ！知らないんですっ！……確かに……」

椅子から立ち上がろうとして二人の兵士に押さえ付けられた。

「……随分と……威勢が良いな…」

俺は、ニヤリと笑うとその男に近付き男に蹴りを食らわせようと構えるとシンが止めてきた。

「ちょっと待ってください殿下……、もう少し…話しを聞きましょう…」

苦笑いを浮かべ俺の肩を叩き、俺はあげた足を床におろすと、シンは男に近付き耳元に何か囁いた。男の顔がみるみる引き攣り目が見開き、俺の顔をみてくる。

……なんだ……

腕を組んで様子をみていると、

「……だからね〜、一生懸命頭を使って思い出した方が良いよ〜？」

シンは男に冷ややかな笑いを浮かべ俺をみてくると、

「……話すと言われても……」

男は真っ青に変色し困惑した顔でシンの方を顔だけ動かして見上げると、シンは極上な笑顔で男をみて、

「……あれっ？思い出せないのかなぁ～？」

「思い出します！思い出します！……もう少し時間を……」

「そう？じゃ、頑張って必ず話すんだよ…？アサンとイサン宜しくね～？」

「「……はい！お任せください！」」

様子を見ていた兵士二人に後を托すと、俺に真面目な顔を向けると、

「……殿下……、お気持ちは解りますが……必ず聞き出しますので、ここは兵士に任せましょう…」

促すように扉をあけられ、先に出るとシンも後から続き扉が閉められさっさと歩きはじめてしまった。シンをジロリとみながら歩き始めると、それに気づき振り向くと、

「あ～、ごめんごめん！だって殿下……脅すのに立ってるだけで十分だし！」

「……あぁ？…俺は全くスッキリできねー……」

親指をたててくるシンに、苛立ちながら答えると、地下にあるガラクタを蹴り飛ばした。物が落ちたりして凄い音が地下に響いた。

「……わ～……、多分……今のでトドメになったよ……大丈夫！必ず背後の人間を捕まえるから～？ねっ！」

……計算かよ……

「……必ずだぞ……？で、あの男に何言ったんだよ？」

俺はシンのいる所まで歩き、軽く叩くとニヤリと笑いながら尋ねる。シンはクスリと笑うと歩き始め、

「最近ね～……拷問について調べてたから……これはイチ押し！って思うのを言っただけだよ？」

例えば……フルーツの皮を剥くみたいに～……、後はヤギとか？……嬉々とした声で話すシンを俺は、……こいつは敵に廻したくねぇ…と思いながらその後をついていき、埃っぽい地下を後にした。

「……で？ユーキちゃんの様子はどうだったの？」

楽しそうな顔から一変して心配そうな顔をしながら、様子を聞いてきた。

「……まぁ、なんか…まだな…取りあえずもう一回顔を見せに行くつもりなんだが……」

「……優しいねぇ～！ほらっ？着いたよ？」

まるで予測の範囲内だと言わんばかりに、いつの間にか悠希の部屋の前に着くとジロジロと俺をみて、悪そうな顔をすると、

「あっ！気がつかなくてごめん…！一回殿下の部屋に行かないと……」

「何でた……？」

「……地下の臭いがついてるし、あの男の臭いもついてるから…ユーキちゃんには……ちょっと……一旦、風呂に入ってからの方が良いんじゃない？」

……あんま、気にならねぇけど……敏感になってるかもしんねぇな……

「……お前、たまには良いことに気がつくな…」

シンに連れられ、自室に向かい風呂に入って出ると、当然一緒に行くと思っていたシンはいなくなっていた。

……アイツも風呂入ってくるのか……それか、先に行ってんのか……

苛立ちながら待っていても来ないので、悠希の部屋に向かう事にし、ドアの前に着くと珍しくノックをした。

情けは無用（後書き）

ちょっと更新ペース落ちててすみません…

俺が返事をする前に、ドアが開いた……。

「こんな時間に食ったのか……」

殿下が部屋に入りながらカレンさんが片付けている食事後をみて呆れたように言いながら入ってきた…。

「……うるさいなぁ…お腹空いちゃったんだよ…」

さっさと椅子に座る殿下に、照れ笑いをしながら言い返す。
カレンさんもクスクスと笑うと、手早く片付けてワゴンを引いて部屋を出ていってしまった…。

……カレンさーん……まだ居てほしかったよ…、この後の会話がなかったら…どうすれば……

「……」

「……」

……あ～、ほら……気まずい……何か話さないと……

「……殿下はご飯食べたんですか…？」

「……」

「……食べてないんですね？」

「……食べた」

「嘘ですねっ！絶対食べてない！」

俺から顔を逸らしている殿下を睨みつけていると、

「……明日の朝、食べる…もう、遅いから…太る…お前と違ってな……」

ニヤリと笑いながら、俺をみてくる。自分を指差しショックそうに言い返す。

「……えっ？お、私…太った？」

「……胸とかにつくんだけどな……っ！…」

殿下の話しが終わる前に、俺は枕を投げつけた！

「……このやろうっ！」

投げられた枕を、殿下は掴むと投げ返してきた！負けじと投げ返して、しばらく投げ合いが続いて息がきれてきた。投げるのを止めて枕に抱き着きながら、

「…あ～！疲れたけど楽しかった～……そういえば、殿下……何しにきたの？」

「……おい……まぁ、いいけどよ……」

何か、言いたそうに俺をみて唖然として頭を触っているけど……なんだっけ……

「……こんなに、元気なら…大丈夫だな……」

「……あー！……思い出したっ！ごめんごめん！……殿下！ありがとう！」

思い出して慌ててお礼を言うと、殿下は……不機嫌そうな顔から一瞬照れ臭そうに笑ったようにみえた！

「……笑った…ねぇねぇ…普通に笑えるんだね、……いつも何か企んでるようにしか……」

「……うるせー…どういう意味だ……俺はもう、帰る……お前もさっさと寝ろっ！」

殿下は舌打ちをすると、椅子から立ち上がった。

「……怒った顔より、笑った顔の方が良いよ！ほらっ、笑う門には福来たるだしね！」

せっかく、心配してくれたのに怒らせては申し訳ない…慌て、褒めたつもりだった……んだけど……殿下が真面目な顔で振り返り、

「……笑う何が服を着るんだ……？」

……俺は、思わず吹き出した……！テンションがやや高いからか、妙に可笑しい……！笑いが止まらない……はっ！と気がつくと殿下が恐い顔で見下ろしてくる……あっ、しまった……慌てて説明したら…、何となく解ったみたいだ…。

「……普通に言えば良いんだ……解りずらい…」

まだ、笑ってしまった事が気に入らなさそうにしていたけど、何とか爆発は防げたみたいだ…安堵して溜め息を吐く…。

「……俺は……、もう行くぞ……」

「……あっ！ありがとうございますっ！おやすみなさい！」

ドアに向かって歩きだした殿下にお礼をいうと、右手をあげて怠そうに振ってきた。殿下が部屋から出てドアが閉まる。

……急に、部屋が静かになった……。外もすっかり暗くなって、妙な恐怖感が襲ってきた……。

……恐い……何だろう…

気になると、色んな些細な音が恐く感じて眠れない…。慌ててベットから飛び起きると殿下の後を追いかけた。廊下の先に殿下が歩いて行くのがみえ、慌てて後を追いかけて走るとやっと殿下に追いついた。
俺に気がついたのか、鞘に当てていた手が離れて驚いた顔でみてくる。

「……なんだ……？何かあったのか……？」

……何にもない…んだけど…

心配そうに聞いてくる殿下に首を横に振ると、

「……こんな時間に振らついんてんじゃねぇ…めんどくせぇ…送ってやるから、部屋に戻れ…」

唸るように怒られて、ビクッとすると手を捕まれ部屋に連れ戻され

てしまった…。
部屋に一緒に入ってきた殿下は、俺を荷物みたいに肩に乗せるとベットに放り投げられた……。

「……全く……ウロウロしねぇで寝ちまえ……」

部屋から出ていこうと不機嫌そうにドアに向かって歩きだす。

……独りじゃ、恐くて寝られない……殿下も不機嫌そうで恐いけど…、独り静かな部屋で寝れない…どうしたら……

殿下の手がドアに触るのと同時に、殿下の服の端を捕まえた。殿下が驚いたのか固まっているのが解った。
…めっちゃ言いずらい……男のくせに恐いなんて…、寝れないなんて……でも言うしかない！…

「……独りじゃ、……寝れない……、凄く恐いんだ……」

勇気をだして、言ったのにしばらく重い沈黙が続いてけど……また、無反応なのか…笑われるのか……笑うよな…俺も、できれば頼みたくないよ！！

「……そう…か」

恥ずかしさで俯いていると、ボソッと呆れたように呟いたのが聞こえた。

……へっ？それだけ？……無視して行く気かな……逃がすものかと服の端をしっかりと握りしめると殿下は、溜め息を吐くとクルリと向きを変えてベットに向かって歩きはじめてくれた…。俺も掴んだまま、着いていくと殿下は服の裾を持つと煩わしそうに振り、

「……歩きずれぇ……離せ…此処にいるからよ……」

「……ごめん」

パッと手を離すと、俺はベットに潜りこんだ。殿下がドカッと椅子

に座ったのが解り、安心するけど寝たら出て行ったら困る。殿下の方を恐る恐るみて、

「なぁ……それじゃ、寝にくいんじゃ……？」

「……寝れる……」

……そこに、ムスっと怒ってますよ～オーラで座られて……寝れるわけねー！今度は、殿下が気になって眠れないじゃないかぁ～！しばらく、殿下に背を向け横になって耐えていたけど…気になる……。起き上がりながら、話しかける。

「……なぁ？」

「……なんだ？……」

やっぱり不機嫌そうに返事をされ、緊張しながら布団を捲りポンポンと布団を叩いた…。

「……横になろうよ……気になって眠れないし……大丈夫！広いからっ！そうしようっ！」

しばらく固まったまま頑固に動きそうもない殿下の手を掴むと引っ張る。

「……解ったから、離せ…」

身につけていた装飾品を外すと、殿下もベットに入ってきた。

「やっぱり！横になった方が眠れるよっ！じゃ、おやすみなさい！」

お互い背が向き合うように横になり……あ～、落ち着く……人の体温って良いなぁ～、人っていうより猛獣？ライオンかなぁ～虎かも……他に…は…

悠希は動物園に行った時の夢を観はじめた。

眉間のシワ（前書き）

小説などと言えるものではないと思いますが…、文章を書くにあたって便利な類語辞典なんてものがあることを知りました…。

勉強になりました！あまり活かされてないですが（笑）

眉間のシワ

「……また、あくび？最近、寝不足みたいだね～？」

フラフラと廊下を歩いている俺を振り返りながら、シンが心配そうに言ってきたが……こいつの場合はあくまでもフリだ……

「……若いっていいねぇ～」

ニヤリと笑いながら話しを続けるシンに、喧しそうに睨みつけボソッと呟く。

「……やってねぇーよ」

……あれから毎日毎日一緒に寝てるが…、そういうのはない……。あんなに安心しきったように寝られると手も出せねー、……これくらいならと、頬にキスしようと思ったら寝相も悪く、殴られた……。あれからどうも身構えてなかなか寝ることもできねー。思い出して失笑しているとシンが無反応なのに気づき見上げると、

硬直していたかと思ったら恐る恐る口を開いてきた。

「……殿下……体調でも悪いんじゃ…？……侍医…そうだ…！侍医を呼んでくるから……部屋に戻っててね～！」

「待てっ！寝不足なだけだ…」

走り出そうしているシンを慌てて呼び止めると、シンは目元に腕をあて泣く真似をし、

「……絶対病気だよ…、あんな可愛いのに……もう一週間くらい添い寝してて何もないなんて…男性機能が衰えるよ…。」

「……てめぇ、言いたいことはそれだけか？……」

怒りでワナワナと手を震わせながら唸り付け、シンを切り捨てようと鞘に手を持っていく。

「わぁ〜！ごめんごめんっ！俺は心配して……、そうだ！今夜はイザベラを久しぶりに呼んだら？じゃ、そういう手筈にしておくからっ！」

慌てて言い捨てるように廊下を走りさって行ってしまった……。

「めんどくせぇなぁ……」

余計なお世話だ……、確かに俺にしては珍しいが…反応しているし……って何を考えてるのか！頭を両手で掴み悩んでいるのに気づくと寝不足だからだ……と気を取り直し、残りの仕事をさっさと終わらせるために重い足取りで歩きはじめた。

少し薄暗くなりはじめた自室に戻ると、軽く汗を流すため湯を浴びると眠気が波のように押し寄せてきた。

「眠い……まだ、夕飯まで時間あるし寝るか……」

ベットに倒れ込むように入るとあっという間に眠ってしまった。

「……んっ？」

誰もいないはずの部屋に人の気配を感じ、目が覚めた。どのくらい寝たのか、眠気はスッキリしている……辺りを見回すと視界に入ってきた外も暗くなっていた。

「……シンか…？違うな……誰だ……？」

枕元に置いて置いた刀に手を伸ばしながら、ドアに寄り添うように立っている人影に尋ねる。

「……殿下…、わたくしですわ…今日はお慰めしに参りました…」

イザベラが、身につけていたベールを外しながらスルスルとベットに向かって歩いてくると、成熟した身体が視界に入ってきた…。

「……シンめ……、呼んでない…さっさと服きて帰れっ…」

去り際に言っていたシンの言葉を思い出し、憎々しげに舌打ちしベットに膝をついて近付いてくるイザベラを軽く押し避ける。

「……殿下…そんなに…そんなにあの子が良いんですの？」

怪訝そうに眉を寄せているイザベラから顔をそらし、睨みつける……

「てめぇには関係ねーだろ？」

「……あんな…あんな目にあった子ですよ？……下民の欲のはけ口になったような子ですよ？…たっ！…」

クスクスと笑いながら言い返してくるイザベラの両頬を、片手で掴み言葉を遮ると床にに背から転げ落ちるとイザベラからうめき声が聞こえる。
その上から馬乗りになると低い声で怒りに声を奮わせながら、

「貴様か……？」

「……う……噂…です…わ…」

怯えきり引き攣った顔で俺を見上げてくる……悠希の事に関しては、閉口令を出し信頼できる兵士しか知らない情報だ……普通の民と言うことすら知らねぇはずだ……

「……殿下……」

押さえ付ける手が緩んだのを勘違いしたのか、イザベラが俺の頬に手を伸ばしてくる……

「……触んじゃね……クズが…」

イザベラの手を払いのけようと振りかぶった時、ドアが開かれる。

「お～い！……殿下夕飯食べ……っ！」

悠希が開かれたドアに立ちこちらを観ている……驚かせようとしたのか、悪戯っ子のような笑みを浮かべていた表情がみるみる青ざめていく……

「悠希様？どうなさいました？……っ！……失礼いたしました……」

カレンも一緒に着いてきていたのか…悠希の様子が変で覗いて様子をみると驚いた顔をし、硬直している悠希の手を引き部屋から出て行った……。

「……で、殿下…？ぅっ！」

平然と頬をなでつけてくるイザベラの手を払いのけ、首筋に剣先をあてた。

破廉恥（前書き）

すみません…、酔って投稿したらダメですね…（笑）ちょっと修正しました！

初めてみる方はスルーで！
女の子の通過点を書きました。

破廉恥

……いけないものを観てしまった……裸の女の人の上に乗ってイチャイチャしてたっ！……夜中ならともかく……、夜中……でも嫌かも～……、なんでだろう……めっちゃイライラする……

部屋にカレンさんと戻ってきた俺は、食べるつもりだった夕飯もとてもじゃないけど、喉を通らないし独りになりたくて、カレンさんには部屋から出ていってもらった。
その後、ベットに飛び込むとこれでもかと、枕を殴ぐると壁にたたき付け…手元が寂しくなり、冷静になって枕を拾いに行く。

……はぁ～、何やってんだろ…枕と言えど、手が痛い……

欝すら赤くなっている手の甲をみて手を軽く振りながら、溜め息を吐く。

……ズキン……ん？なんだ？……腹に違和感が…痛いような…

サワサワとお腹を触ると少し楽になるような気がした。

取りあえず風呂に入って今日はサッサと寝ることにし、実行に移すべく浴室に向かって歩きはじめた。

翌朝……俺の叫び声でカレンさんが部屋に飛び込んでくる気配を感じた。

「悠希様！！悠希様！！どうかなさいましたか？……開けますよ…？」

トイレに閉じこもっている俺に声をかけてくる。
ノックされ…ゆっくりドアが開けられる。

「……カレンさん…、私……病気かもしれない…しかも、死ぬよ……」

便器の側でヘタリ込んでいる俺と周りの様子をみて、カレンさんは微笑ましくみてくる。

……全然…落ち着いてられないんですけど……何なのさ……？

「悠希様……？大丈夫ですよ…？女の子になられたのですね…？」

……へっ？今更…何言ってるの？前から女の子じゃん……

あっ！……保健体育の授業を思い出し、知識はあくまでも知識だと、痛感した。

……想像以上の出血に驚くわっ！…こんなに……酷いのかっ？

……腹も痛い……

「さぁ着替えて、今日明日はお辛そうですから…ベットでお休みになっていた方が良いかもしれませんよ？」

カレンさんが、手を差し出してきたので捕まると浴室に連れていかれた。

手伝いますと、手を伸ばすカレンさんを部屋で待っていて下さい…とお願いして支度をはじめる。

用意された服装は……いつも通りなんだけど…、チュニックに七分のパンツ？スタイルと……懐かしの布オムツみたいな物が置いてある。

……カレンさーん…赤ちゃんみたいだよ…

何とか支度を終えて部屋に戻ると、カレンさんがテーブルにお茶を用意していてくれた…。

「さぁ、これをお飲み下さい…。少し楽になると思いますよ？」

楽になると言われて、エスプレッソが入っていそうな小さなカップに手を伸ばし一口飲むとブッと吹き出してしまった。

「…～～～～っ！！苦っ！苦いっ！……何か独特だね……」

「……悠希様！？大丈夫ですか？……でも、楽になりますから

…」

カレンさんは、俺の背中を優しくさすると口直しの水を用意してくれて、準備が整うと覚悟を決めて一気に飲み込んだ。

「まっず〜！！」

口に苦味が広がる前に急いで水を飲んだけど、効果はないみたいだ…苦さで腹痛を和らげようとしているのかな…

その後の朝食で口から苦みがやっと消えて一息ついていると宰相さんが、ノックして部屋に入ってきた。

「ユーキちゃ……」

「宰相様……ちょっと宜しいですか？」

「えっ？……ちょっ…カレン…」

宰相さんが、俺の名前を呼ぶのを遮りカレンさんが宰相さんを部屋の外に連れていってしまった。

部屋に独り残され…腹も痛いからベットにのそのそと潜り込む。

……痛いし、こんな苦しみが毎月あると思うと憂鬱な気分だな……一週間くらい続くなんて最悪だ…

溜め息を吐きお腹を摩っていると、ドアが開かれた。

「……殿下……？」

……ゲゲッ！今一番顔を観たくないのに！何しに来たんだっ！！…

顔を布団で隠し丸くなると、殿下がズカズカと足音が近付いてくる。

「……おい……昨夜のはな……」

……聞きたくない！聞きたくないっ！……

…布団を掴み更に丸くなる。

「……なんだ？……虫みたいだぞ……？」

ククッと笑い声が聞こえ布団から跳ね起きると、何故か勝ち誇った顔の殿下を睨みつけ

「……殿下が、……誰と何をしていようと関係ないですからっ！」

「……可愛くねー……ん？何か顔色が悪くねぇか？」

……顔色どころか、気分も悪いわっ！なんて言うか……お父さん

の浮気を発見みたいな感じだし…、俺にお父さんはいなかったけど…殿下に対して、お父さんだったらこんな感じかな～とか思ってたからそれで、ショックなのか…

独り納得して、考えているとおでこに何か触ってきたので視線を上げると、殿下の顔が視界に入り殿下とデコを合わせていた。

「……何か…、熱あんじゃねぇ？……熱い……」

「……大丈夫だよっ！」

何か照れ臭くて殿下のデコを押し退けると離れて近くの椅子にドカッと座ると眉をしかめて

「……本当か？まぁ……あんまり無理すんじゃねーぞ……？」

……えっ？長居するの？腹も痛いし、何か血の匂いもしていそうで…出来れば早く去っていってほしい…

「薬も飲んだし……大丈夫ですよ？」

ニッコリと殿下に笑いかけると、安心したように殿下の表情が和らいだ。

「あっ！……今夜から独りで寝るから…殿下もあの女の人と仲良くしてねっ！」

「……そんなんじゃねぇよ……アイツはなぁ……」

「…殿下は、尊敬っていうか……憧れ？みたいなのがあるから…勝手にお父さんみたいに慕ってたけど、これからは邪魔しないよっ！」

何やら言いずらそうに口ごもっている殿下に被せるように話を始めちゃったんだけど……最初は、照れたように聞いていた殿下の顔が……言い終わる頃には真っ青な顔に変わっていた。

「……？……殿下？」

殿下の顔の前で、手を振るけど全く無反応だ…。
突然立ち上がり、足取りも悪い状態で部屋から出ていってしまった。

……なんだ？？……まぁ、良いや…取りあえず休みたいし……思ったより早く出ていってくれて良かったよ…、はっ……もしかして匂ったのかな…野生動物だからな……、寝る前にちょっとナプキン（仮）変えよう……

薬が効いてきたのか腹痛は楽になったけど…、匂いが一度気になると落ち着かなくて、ベットから起き上がると浴室に向かった。

勘違い

殿下が出ていった後、宰相さんとカレンさんが戻ってきて、殿下が押し倒していた女の人は俺の暴行未遂事件（？）を操っていた犯人だと聞かされた。

「そうだったんだ……」

俺の反応を伺っていた二人は、まるで人事のようにあっさりした反応に驚いているみたいだ。宰相さんが更に顔を覗き込み、

「……それだけ？」

「……悠希様……余程ショックを受けて……宰相様が余計な事するからですわ……」

ハンカチで目元を押さえながらカレンさんは、宰相さんを睨みつけている。

「……ごめん…、さっきも説明したけど…殿下にならポロッと自供するかと……」

……二人の間に微妙な空気が流れて息苦しい……

「あの～！その…もう気にしてないからっ！で、……その女の人は今どうしてるんだ？」

「「えっ？殿下から聞いてないの？（ですの？）」」

……おっ！二人とも反応してくれた…

「殿下……来たんだけど……」

さっきの様子を一通り説明すると、殿下と同じように二人とも顔色が変わっていった。

「あちゃ～、そんなこと言っちゃったの？」

「……殿下可愛そうですよ…」

「へっ？なんで……」

キョトンとして宰相さんと、カレンさんの顔を交互にみる。

「……殿下は…」

言いずらそうに口を開いたカレンさんの肩を叩いて宰相さんが止めると、期待した顔で俺を見て自分を指差して、

「……因みに、俺は？」

「ん～……お兄ちゃんかな…！因みにカレンさんは……お姉さん…！」

腕を組んでしばらく考えた後、交互に指差しながら答えた。

「「お兄ちゃん！（お姉さん！）」」

二人とも嬉々とした表情を浮かべ、もう一回呼んでくれないかと言われて繰り返す。

「お兄ちゃん…お姉さん…改めて言うと恥ずかしいな…」

照れ笑いを浮かべると、カレンさんが堪えきれなかったのか、ギュウッと抱きしめてきた。

「悠希様！とても嬉しいです！」

「俺も、嬉しいよ！こんなに可愛い妹で！……でも、殿下も俺と同じ歳なのにどうして？……」

俺とカレンさんを微笑ましく観てた宰相さんが、不思議そうに聞いてきた。

「う～ん……頼りになるし、力強そうで憧れからかな…！やっぱ…あの安心感はお父さんくらい貫禄がないと無理だよ。……それに殿下と寝ると良く眠れるんだ！」

キッパリとした声で宰相さんに向かって答えると、カレンさんも抱き着く手を緩めて俺の顔をみている。

「……それでは…また今夜から一緒にお休みになるんですね？」

しっかり支度しておきますと張り切っているカレンさんに、そっと耳打ちする。

「……血臭いかもだから…一週間は嫌だ……」

「……大丈夫ですよ？理由も解らず一週間待たせるのも……そんなに気になりませんよ？」

カレンさんも気を使って俺の耳元で囁いてくれていると

「何？何？お兄ちゃんも仲間に入れてほしいな……」

宰相さんが存在をアピールするように咳ばらいしてこちらをみてくる。

「……内緒ですよ。そういえば…、宰相様…殿下のご様子を見に行かなくて大丈夫でしょうか？」

フフっと楽しそうに微笑んだカレンさんに、上手く交わされ仲間に入れて貰えず、少しふて腐れた様子の宰相さんは、殿下の事を思い出したみたいで

「あ～！忘れてたよ……。……どこにいるかな～、あっもしかして…腹いせにイザベラを始末しちゃうかも…この間も危うく殺しちゃいそうだったの止めたしね……」

いつもヘラヘラしたイメージの宰相さんが、真面目な表情をするので不安になってくる。

……えっ…まさか！俺は褒めたつもりだったのに…、そんなに酷いことを言ってたのかな……

「心配だから、ちょっと探してくるよ～！」

宰相さんは、少し急ぎ足で部屋をでて行こうとしているので、急いで呼び止める。

「宰相さんっ！私も行きたい！」

……日本は、人を殺してはいけませんルールがあるからか……いくら襲われたとは言え、人を殺すのはやっぱりどんな理由でも嫌だ……。

宰相さんも、カレンさんも渋っていたけど俺の意志を尊重してくれて、結局三人で向かうことにした。

プロポーズ？

「お父さんみたい…お父さんみたい…」

俺の頭の中を悠希の声がグルグルと廻り、フラフラとした足取りで目的の場所まで向かう。

……アイツめ！何が父さんだっ！憧れとか尊敬とかカッコイイ（？）とか持ち上げておいて、複雑な気分だ…。嫌われてはなく、むしろ好かれてるようだが……やはり、ここはっ…！

グルグルと考えている内に、目的地に着き鉄を叩く音が聞こえる扉を開ける。

「……出来上がったか…？」

「はっ！……殿下…わざわざ……取りに来なくてもお届け致しましたのに……」

熱した鉄を叩く手をとめ、汗を拭いながら初老のアバンザが恐縮し

た表情で、こちらをみて簡単に包まれた物を差し出してきた。

「……こちらです…如何でしょうか……」

渡された物を開き確認し、笑みを浮かべ

「……相変わらず、良い仕事するな……悪いな無理言っちまって…貰ってくぞ…」

「いえいえ…光栄でございます…言われた通りの試用になってますよ？ご安心ください。ですが……何に使われるのですか？」

部屋から出ていこうとすると話し掛けられ、ギクリとしながら振り返り、

「……人にやるんだ……」

「……で、殿下が人に贈り物を……っ！……まさか…えっ！

……包み直しましょう…。」

やたら、興味津々にアバンザが俺をみて渡した物を取り上げると、シンプルだが上質な紙で包み始めた。

……俺用はそのまま渡したくせに……そんな綺麗な紙があんのかよ……まぁ、アイツも喜ぶだろう…

じっとみていると、包み終わった物を渡してくるから受け取り、礼を言いながら部屋をでて行こうとすると声がかけられた。

「きっと、宰相様も喜んでくれますよ！」

「……はぁ？……アイツに何かやるかっ！」

どなたにやるのか聞いてくるが、めんどくさいからサッサと扉を閉めてやった。

悠希に渡すタイミングを考えながら歩いていると、アサンが俺に気がつき走ってくる。

「殿下……、宰相様が探してました…。囚人の間でお待ちになってるかと…」

「あぁ、あの女の処分についてか……さっさと殺してしまって良いのにな…」

鼻で笑いながらアサンをみると、どう応えれば良いのかうろたえている。その様子にニヤっと笑い、

「……シンも、うるせーから此処から追い出すくらいだ…。」

アサンを引き連れ囚人の間へ向かうと、扉の前にシンがいた。声をかけようとすると、シンの横から悠希とカレンが顔を出した。三人とも俺の手元に目がいっている。持っているものをサッと背中に隠すと、悠希の目に力が入り、力強い声を出してきて驚き思わず身構える。

「殿下っ！！お話がっ！」

「……なんだ…？」

「……殿下！イザベラを殺さないでよ……私はもう大丈夫だし！……あれくらいで死刑だなんて言わないで…ちゃんと前言ってくれたみたいに殿下の言うこと聞くから！だからっ！お願いします！」

…悠希が勘違いして頭をさげてくるが、あの女のためにお願いされて面白くない…だいたいなぁ…

「お前を、襲った奴だぞ…？」

悠希の身体がビクりと強張ったような気がし

「悪りい…大丈夫だ…ちゃんと処分しとくからな…」

悠希の頭を撫でると、シンに顎で指図し扉を開けようとすると、悠希が腰に抱き着いてきた。

「……殺したらダメだって！殺したら殿下の事一生怨んでやるっ！もう、殿下の言うこと何か聞かないからなっ！出てってやるっ！」

必死にしがみついてくる悠希を見下ろすと、何だか癒された。なんつー可愛いんだ……この必死な感じが可愛いじゃねぇか……

「……お前には、……ずっと俺の側にいてほしい…」

つい、声に出してしまったが…、悠希は相変わらずしがみついてくる。

「いるいるっ！だから殺さないでよっ！！」

……ん？……もしや、今なら何でも聞いてくれるのか……

「殺さねーから安心しろっ…、俺の事はリューって呼べ…殿下って呼ぶんじゃねぇ…、後は……めんどくせーな……お前、俺の嫁になれ…」

渡すつもりだったプレゼントの刀を悠希に差し出すと恐る恐る受け取ってくれた。

「本当か？ありがとう！」

悠希が刀を握りしめ満面の笑みを浮かべているから、俺は抱きしめようと手を延ばしたが、悠希はクルッとシンとカレンの方を向くと、誇らしげに言い放つ。

「良かった！良かった！武器も確保しましたっ！」

……はぁ？……武器ってなんの事だ……

プレゼント…？（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

思ったより更新するって大変だと思いました。出来るだけ早く更新したいと思いますが、マチマチになるかもしれません…楽しんで書きたいと思います。

プレゼント…？

殿下を探して、皆で囚人の間の扉の前で張り込んでると、兵士を連れて現れた殿下の手元には、良く時代劇の切腹シーンにあるような、白い紙で包まれた小刀らしきものがあり思わず凝視してしまった。

……やばい…本当に殺すつもりなんだ……！宰相さんもカレンさんもどうしたら良いのか悩んでるし…よしっ！説得しよう！…

何とか必死に殿下に抱き着いたりして、カレンさんに伝授された可愛い仕種を、試したら効果があったのか殿下の手から、武器が渡されてしっかり掴むと宰相さんとカレンさんの方を振り返る。

「良かった！良かった！武器も確保しましたっ！」

……やったよ！良かったよ…！ん？……なんだ…？

武器を確保できたのに、二人の反応が思ったより悪くて首を傾げると、背後から怒りを含めた声が聞こえ振り返る。

「……てめぇ…、それはプレゼントだ……」

「……プレゼント？誰に？何を？」

「お前にだっ！！」

殿下の言っていることが今一解らなくて首を傾げると、ついに怒りが爆発したようにいつもより声が大きくなった…。

……ひぃ～！一体何なんだよう……

「プレゼント？なんで？しかも……なんでこのタイミングなんだ？」

殿下はしばらく苦悶の表情をしていたけど咳ばらいをして俺の後を指差し、

「……、おいっ！笑ってんじゃねぇ…。」

……笑っているのは絶対、宰相さんだ。振り返らなくてわかる…。

「ごめん、ごめん……、さて気を取り直して取りあえずイザベラに処分を言い渡そうか？」

「……、そのつもりだ。……。」

殿下の視線が俺に移ると、何か良いたげに口は開けられたけど声の変わりに小さく溜息を吐くと、兵士が開けた扉から部屋に入っていった。

俺とカレンさんは、宰相さんに止められて部屋の前で聞き耳をたてることにした。

「……イザベラ、お前は流刑に処する。」

殿下が、低いけど良く透る声が聞こえた。

「カレンさん……、流刑って……」

「遠くの地に行ってもらうことですよ……。悠希様が気にすることはないのですよ……。」

カレンさんに小声で尋ねると、俺の顔を心配そうに見ながら答えた。

……やっぱり、それも嫌だな…反省さえしてくれれば良いんだ……

立ち上がりノブをギュッと握ると閉められた扉を勢い良く開けた。

「……流刑じゃなくても良いよ！お願いがあるんだけど……」

部屋の中の視線が俺に集まるのを感じて、一瞬たじろいでしまったけど気を取り直して牢みたいな格子の向こうにいる女の人を見据える。

「……も、申し訳ございませんでした…。命を助けて頂きありがとうございました…。謹んで…、刑を受けたいと思います…。」

女の人は俺の顔を真っ直ぐにみて、震える手を握りしめ頭をゆっくり下げる。

……えっ？意味が解らない……。あっ！もしかして、外の騒ぎが聞こえていたのか……、殿下の声が聞こえたくらいだ……そうかもしれない…。誤解なんだけど……ね。

「私は、イザベラさんが謝ってくれてスッキリしたよ！……」

頭をかき、イザベラさんに向かって笑いかけると身体が宙に浮いて殿下が俺を抱き上げて外に出そうとしている。

「……勝手に入ってくんじゃねぇ…」

「わぁ〜！待って待って！追い出すなんてしなくて良いよっ！イザベラさん…私の友達になってくれよっ！」

ジタバタともがきながらイザベラさんの方に顔を向けて言うと、上から罵声が聞こえる。

「馬鹿かっ！てめぇは…何されたのか忘れたのか…っ！」

頭を抱えて一瞬身体が強張ったけど開き直り、殿下を睨みつける。

「もう、済んだことだし……良いじゃん！良いじゃん！当事者の私が良いって言ってるんだから……リュー？頼むよ…」

「……うっ……解った…。」

……よぉし、甘えた目つきを取得した……一撃だなっ！！

殿下に見えないところでニヤリと笑うと、床に降ろされる途中で殿下の手が止まった。全員が俺のスカートに視線が集まっているような気がしてみると、真っ赤だ！殿下が抱えた衝撃もああったし、走ったりもしたからだと思うけど恥ずかしさで顔から火が出そうでその場にしゃがみ込む。

「まぁ！悠希様……早く着替えましょう…」

恐る恐る部屋を覗いていたカレンさんは、身につけていたエプロンで俺のスカートをサッと隠すと部屋を出て行こうとし、殿下に呼び止められる。

「シン…イザベラを出してやれ…、イザベラ…次は殺すからな…？……どうしたんだ？まぁ、良い…俺が連れていく…」

宰相さんに指示を出しながらイザベラさんの前に行き、冷気の篭っ

た声で一喝すると俺を抱き上げる。もう、歩きたくないと思っていたから正直助かった。

「……しょうがないな…、了解…アサン、イザベラを出してやれ…」

宰相さんが溜息を吐きながら兵士に指示をだしているのを聞き、俺は色んな感謝の気持ちを込めて殿下をみる。

「……殿下ありがとう…。イザベラさんのこともありがとうございます。」

「……リューだ…」

ふて腐れたのか、ガッカリしたように呟く殿下が面白くて、仕方ないから言ってやることにした。

「解った、リューありがとなっ！」

リューは、満足そうな極上の笑顔を向けてきた。

……何か、見慣れないからか恐いっ…何か企んでるのかな…心臓が飛び跳ねているし、変な感じだ…。血の巡りが良くなると…今はヤバい気がする…。

「……リュー、ごめんっ！早く連れていってほしいかも…」

リューは、張り切って俺の部屋の方に向かって歩き出した。

……カレンさん、頑張って着いてきてください……

プレゼント…？（後書き）

色んなことをサラっと流してしまったよ……これからですねっ！
やっと…やっと…、あらすじに書いた感じになるかな……？

母を探そう！（前書き）

良いタイトルが思いつかなかったです…。

遅くなりました…。

母を探そう！

部屋に着くと余程焦ったのか、殿下は浴室まで入って来て服を脱がせようとしてきたから追い出したりなかなか大変だった。溜息を吐き安堵したのも束の間で、今度は冷静になってくるものだ…。

……あ～、改めて考えると恥ずかしい…どんな顔で部屋に入れば良いのか…外ではカレンさんと殿下が待っているよな～……

ノロノロと手を動かすと血漏れした着替えも終わり、浴室から出ようとドアノブに手を伸ばすと勝手にドアが開かれた。

「……遅い！……倒れてるのかと思ったぞ……」

「……な…っ！勝手に開けるなっ！」

殿下のおかげで気まずい思いはしなくてすんだけど、変わりに俺をみるカレンさんと目が合うと咄嗟にでた言葉遣いを責めているような気がして、

「…大丈夫だから……勝手に開けないでください……」

改めて窘めるように殿下に言い直し、スタスタとカレンさんの所に歩いて行こうとするけどまたしても殿下に抱き上げられた…。

「……大丈夫だから、おろしてくれっ！……ください…」

殿下の目をみて抗議したけど見事に聞こえない振りをされそのままカレンさんのいる所まで連れてかれると、椅子に座らせてくれた。

「……ありがとう…」

一応、お礼は言ったら殿下は熱の篭った瞳で見詰めてくる。

……なんだ？なんだ？…熱でもあるのか…？

カレンさんが用意してくれたマズイ薬を飲み干し、殿下が差し出してきた美味しいジュースを飲もうとしたら、何と殿下は自分の口に含むと顔が近付いてくる。

……はぁ？まさか…良いから早く寄越せっ！ふざけてる余裕があるマズさじゃないんだっ！

「う～っ！……早く下さいっ！」

殿下の顔を押し戻しながら、グラスを奪い取り一気に飲み干した。

「せっかく……飲ませてやろうとしたのに…」

「なっ……！！めちゃくちゃマズイからっ、ふざけてられないしっ！自分で飲めるから良いですー」

俺をジトッとした目で睨みつけながら、ブチブチ文句言う殿下に口を尖らしながら言い返していると、カレンさんのクスクス笑いが聞

こえ、

「フフっ…！仲が宜しいですね……殿下…、式はいつになさいますか？」

「…まぁな……、…式か…、出来るだけ早くしてぇな…」

「えっ？何々っ！リュー結婚するのっ？」

殿下とカレンさんの話に興味を引かれ、驚きながら殿下の顔をみると、しばらく黙り込み……俺を指差し、

「……お前……」

……なっ…！何ですとーっ！……一体いつそんな話に……全く記憶にない……。

……今までの出来事を思い出すが、心当たりは刀を貰った事くらいだ…。また、からかわれているのかも……。

口をあんぐりと開けたまま、殿下とカレンさんを観察していると、

「……おい…、まさかっ！聞こえて……」

顔を手で覆いしばらく悩んでいた殿下は、咳ばらいをすると、俺の手をとり目をジッと見つめて、

「……好きだ…結婚しねーか…？」

……結婚～？？改めて言い直して貰っても……こんな事言われた覚えはない…、返事した覚えもない。殿下の目は真剣だ……顔が熱い……ど、どうすれば……

「……俺が嫌いか……？」

手を握る手に力が入り痛いくらいだ。首を横に振り、必死に考える。

「嫌いじゃない…けど…、結婚できない…かな…？」

「なんでだ…？」

「……私の国では１５歳は結婚出来ないし、未成年の結婚は親の同意が必要なんだよ……！」

……そうだよ！そう！良かった、未成年で……

「……ここでは立派な成人だが……、お前の国はいくつなんだ？」

「二十歳だよ！」

一歩も引かないつもりの殿下にキッパリと答えると、殿下の顔がまるでこの世の終わりのように変わっていく。

「……この俺に、五年も待てと言うのか……？……無理だ…」

「えっ、……私の国じゃないから…リューは聞いてくれないのか……、悲しいなぁ……」

俺の気持ちを無視して、強行手段にでそうな殿下に驚き少し考えた後、しんみりとした声で言いながら殿下をみる。

「悠希の母を探すぞ……」

即答だった…。
何故か胸元を押さえて苦しそうだけど……、今更母さんがすぐに現れる訳でもない……よしっ！取りあえず、結婚はないっ！

「……母の特徴を教えろ…、そうだ！絵で描いてみろ…」

俺と殿下のやり取りを見守っていたカレンさんに、紙と鉛筆を持っ

てくるように頼むと、描けないと言っても聞いて貰えず一応渋々描いて二人に描きあがった絵をみせる。

「……描いたけど…」

「……まぁ…」

「……人間じゃねぇ…」

……ひどい…確かに園児レベルで全く解らないだろうけど…描けと言ったのは殿下のくせに！せめて…笑って欲しかった…。

「……悠希様に似ている方を探しましょう！」

「そうだな…、お前の肖像画を絵師に描かせるか…」

二人は相談を始め、……俺の絵はなかったことにされた。母さんが見つかったら見つかったで有り難いような迷惑なような…。まぁ、

何とかなるだろ…。

特訓

くそっ！結局…一週間くらい部屋に入れて貰えなかった…。いやっ…入れて飯だけ一緒に食べては何かと理由をつけては追い出された…引っ掛かった俺も俺だが…イライラする。
イライラすると言えば……当然だが、すぐには悠希の母親は見つかるはずもない…
本当に魔女なら、実の娘（？）の気配を探って現れているはずだからな…、一応似顔絵を交流のある諸国には送ったが……

「な～に？、難しい顔しちゃって……眉間にシワの跡ついちゃうよ？どうせユーキちゃんの事だろうけど……」

「……まぁ、そうだ…。止めろ…てめぇにやられても嬉しくねー……」

俺のシワに、手を延ばしてくるのを軽く避けるとシンは、つまらなそうな顔をし目の前の書類の分類作業を続けると、何かを思い出したのか急に声を出し、俺もハンコを押す手が止まる。

「……なんだ？……」

「ん？……取りあえず……仕事終わったらで良いや…」

俺の目の前の書類の山をみてシンは続きの作業を始めるから、俺も黙々と一通り仕事を終わらせる。

「……で、何だ…？」

「うん？……あ～、終わったね！ユーキちゃんが呼んでたよ？大丈夫！仕事終わってからで良いってさ！」

書類の山が片付いたのを目で確認したシンは、とんでもなく重要な事をサラリと答えてきた。

「てっめぇ……早く言え…」

テキパキと身支度を整えて悠希の部屋に向かうべく部屋から出て行こうとすると、シンが後ろからついてくる。

「……仕事よりユーキちゃんを優先にするからさぁ～、一通り片付くまで待ってたんだよ！」

「……当然だ。」

ガツガツと歩く速さを変えずに歩きながら答える。

「あっ！部屋にはいないから…道場にいるよ！」

早く言えっ！と言いたくなったが、何か言いたくないムカつきを感じ、シンを睨みつけると黙ってクルリと道場に足を向ける。

「……なんで？道場なんだ…？」

「さぁ？……俺も解らないけど…」

嫌な予感がする……

道場に着き入ると、兵士達が訓練しているのが目に入る。

……まさか、こんなむさ苦しい中に悠希がいるのか…何か、全体的に空気が変だが…妙に張り切っているような…

「うわぁ～、凄いよ！強いんだねっ！」

可愛い声が聞こえ、その声の主を探して人だかりに近付いて行くと、竹で作った刀を使い稽古用の防具を付けた兵士が模擬試合をしていたみたいだ。そこに悠希の姿を見つけた。

「あっ！リュー！この人強いんだよっ！」

「……何をしている…」

悠希が、試合に勝った兵士の汗を拭きながら俺に気がつくと、試合なのか悠希に夢中になっていた周りの兵士達も俺に気がつき道を空けひざまずいた。
なかでも、悠希に汗を拭かせていた兵士の顔色が悪くなっていく。

「……で、殿下には敵いません……」

「わかんないよ〜！リューって強いの？勝てるかもっ！」

「……叩きのめしてやる…」

「……いえっ……あのっ……殿下みずからなど…滅相も……」

「……うるさい…、サッサと支度しろっ……」

「リュー……脅すのは無しだよ…頑張って！」

悠希が恐縮しきっている兵士の肩を軽く叩き、イライラが募っていく。

……殺す……悠希に馴れ馴れしく触られてるんじゃねぇ…

「……ひっ……よ、よろしくお願いします…」

俺の殺気を感じたのか、兵士達がいけにえに選ばれた仲間を憐れな目で見守る中、悠希だけがキラキラとした目で試合を見つめている。

途中で、カレンが悠希の目を隠したけどな……。

特訓（後書き）

ヤバイッ！夏には終わる予定だったのに……無計画ですみません…。7月8月は、仕事が多忙になるため連載が本当に遅れるかもしれません。

私にとっても、日々の息抜きですので出来るだけ頑張ります！

特訓2（前書き）

お久しぶりです！
更新に戻って参りました（笑）

すっかり仕事モードになってしまいまして…リハビリをかねて恋愛シュミレーションゲームしてトキメキ心を育ててました。

そして、ハマリ抜け出せなくなった（笑）

待っていてくださった方々ありがとうございます。
これからもよろしくお願いしますm（．＿．）m

特訓2

「……あっ…！」

「うっ……」

宰相さんの慌てた声が聞こえたのと同時に、ドコッ！っとバスケットボールを壁に力いっぱい叩き付けたような音とうめき声が聞こえ、目を隠しているカレンさんの手を退かすと、殿下と試合していた兵士が仰向きに床に倒れているのが目に入ってきた。

……へっ？何が……バスケットボールじゃなくて人だったのか…

「遅かったか…殿下……本気でやるなよ…ちょっと大丈夫？……じゃないね……」

窘めるように殿下を見た後、宰相さんが倒れた兵士さんに呼びかけるけど、反応がない。

「……訓示しただけだ…」

全く悪びれる様子もなく模擬刀を肩にのせ、スッキリした顔をしながら呟く殿下に宰相さんは呆れ顔を浮かべ、

「全く…、悪いけど医務室まで運んでやってね？」

「「はいっ！」」

何故か兵士達は、率先して争うように運んで行こうとし、それに気付いた殿下はニヤリと笑うと、

「……そんなに、必要ねぇだろ？……お前とお前で運んでやれよ？……他の奴らは、特訓しろっ！付き合ってやっから……」

指を指された兵士は、安堵を浮かべ、いそいそと意識を失った兵士を連れて行った。残された兵士さん達は、殿下と目を合わせないように目を逸らすとペアを組み練習している体形に素早く戻っていった。

「……なんだ、つまらん…シン、たまには勝負するか？」

相手がいなくなってつまらなさそうな殿下は、矛先を変えて軽く素振りをすると、悪ガキのような悪戯心満載な顔を宰相さんにむけた。

「……良いけどさ…。リュウの馬鹿力を相手にしたら俺、骨折れるよ…そしたら、仕事出来なくなるから一人で全部やってね……」

思いがけず宰相さんが、承諾したと思ったら口だけだった…。絶対、嫌だというオーラを身に纏って殿下に言い返すと、

「……。しょうがねぇなぁ…」

殿下は一人で仕事する姿を想像したのか、渋々と刀を片付けようとしている。

俺は慌てて殿下を呼び止める。

「じゃ、私と勝負しようよっ！ってか戦ってみたいっ！」

「「「……はっ？えっ！？」」」

宰相さんやカレンさん、殿下だけじゃなくて、さりげなくこっちの様子を伺っていたのか、兵士達の方からも驚いた声が聞こえた。

「そんなに驚く？リューに教わった方が早く強くなれそうじゃんっ！」

まさか、全員から反応されるとは思ってなかったから、勢いにのまれないためにも両手の拳を強く握りながら言い返す。

「……教わるのは良いけどさ、殿下は手加減が出来ない馬……（鹿）、じゃない…出来ない方だからね…」

「てめっ……！今、馬鹿って言おうとしただろ……」

忠告を呟いた宰相さんに殿下が、殴りかかるような勢いで詰め寄っていった。

…あ～、また殿下と宰相さんのコント（？）が始まってしまった…

「……悠希様は、何か武道でもなさっていたのですか？」

殿下と宰相さんの掛け合いを止めるタイミングをみていると、カレンさんが話し掛けてきた。

「ん～、まぁ……健康（男らしさ）の為に……」

俺はカレンさんに、ニッコリ微笑むと殿下達に向かって声をかけた。

「お～い、漫才はその辺りでさっ！リュー勝負だ！」

特訓２（後書き）

うん…久しぶりなので違和感あったら申し訳ありません……。

これからは、あんまり間が空かないように頑張ります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5314t/

アマリリス

2011年10月9日16時12分発行